

報告書

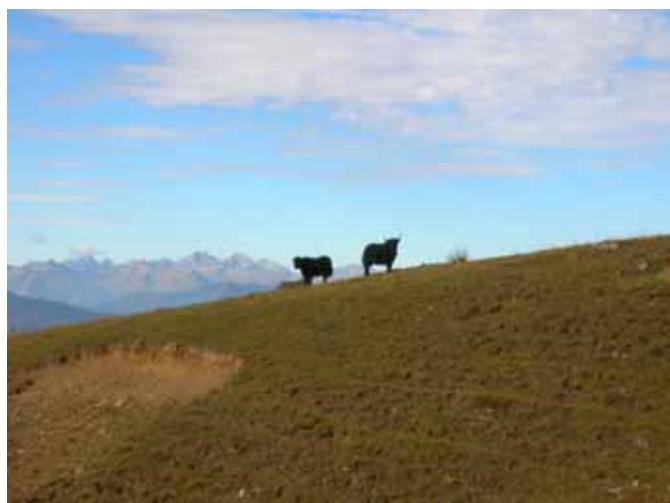
2007

バーワンシャン
[霸王山 5551m]

[中国・四川省・邛崍山系]



(社)日本山岳会・広島支部創立十周年記念登山



JAC Hiroshima section

(社)日本山岳会・広島支部創立十周年記念登山隊・霸王山遠征

総隊長： 杉村功 登攀隊長 名越實 学術隊長 田中勝彦

登攀隊： 名越實・松島宏・吉村千春

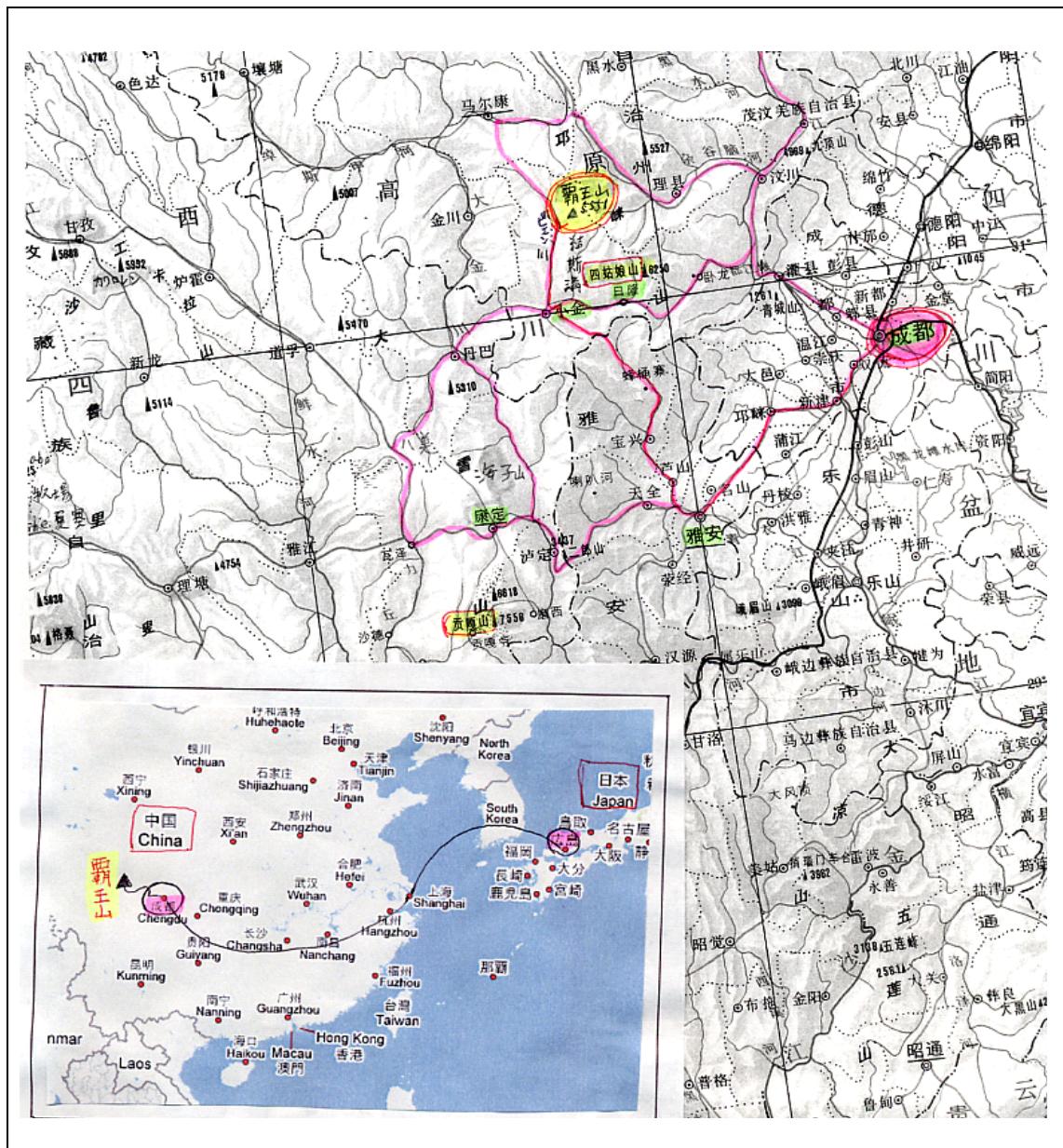
学術隊： 杉村功・田中勝彦・宮田賢二・那須正義

遠征期間： 2007年9月22日～10月21日

山域： 中国、四川省、チョンライ山系、小金県、両河郷、三段地地区、彭現村

山： 霸王山（バーワンシャン；5551m）／ 石筍山（スースンシャン；5183m）

登攀ルート、登山スタイル： 南岩稜／東稜、アルパインスタイル



ご挨拶

霸王山登山隊 総隊長 杉 村 功

日本山岳会広島支部創立10周年記念事業の計画の中に、海外登山として“霸王山(バーワンシャン:5551m)”が最終決定されたのは平成18年末であった。

実はその前年8月、名越隊員が現地を踏査し、この山についての貴重な情報を持ち帰った。“山頂王”として古くから土地の人達に崇められている「未踏峰 霸王山へ」の思いが、ここに広島支部の大きな夢となったのである。

その後熱心な検討や準備の会合が重ねられ、次第に登山計画も具体的になってきた。当初支部会員の周辺トレッキング案もあったが、結局登攀と学術調査とに目的がしづらった。まず登攀隊は名越隊長と松島、吉村隊員のベストメンバーで、冬期氷壁登攀等きびしい訓練を行い登山技術に磨きを掛けた。また学術調査隊は、田中隊長以下宮田、那須、杉村の4隊員で、専門分野の調査・準備を着々と進めていった。そして9月4日の最終会合で、隊の行動計画及び装備全般についての入念なチェックがなされ、緊張感も高まってきた。

9月10日、東広島市西条の前垣邸で、支部関係者による盛大な壮行会が開かれた。席上会員および支部友会員から心暖まる励ましの言葉と多額の募金を頂戴致し、感謝の御礼を申し、登山隊の霸王山登頂への決意を述べさせていただいた。

また9月22日早朝の広島空港出発に際しても、大勢の方達が見送りに来ていただき大変有難く、お礼を申し上げると共に、目的達成への大きな責任を感じた次第である。

幸い天候にも恵まれ、登山日程も略々計画通り順調に進行し、10月3日念願の霸王山初登頂が果たされた。さらに10月5日には未踏峰の石筍山(5183m)にも登り、全隊員が無事故で下山し、帰国することができた。

この度の登山隊成功は、ひとえに広島支部会員および支部友会員皆様からの物心両面での暖かい御援助によるものである。又各種業界から多くの御支援を頂き厚くお礼を申し上げる次第である。更に現地での登山活動に際し、四川省登山協会、四川大地探検有限公司その他地元住民の人達からいただいた御好意・御協力にも厚く感謝を申し上げる。

さて霸王山初登頂の実績は、広島支部の貴重な財産として大切にしたい。そして今なお未登峰の多いこの地域へ、これからも積極的に登山活動を続け、新ルートの開拓や各種調査が行われることを期待している。

終わりに、この度の快挙がインパクトとなり、広島支部が次の新たな夢に向かって更なる発展を、心から願うものである。

2008年1月

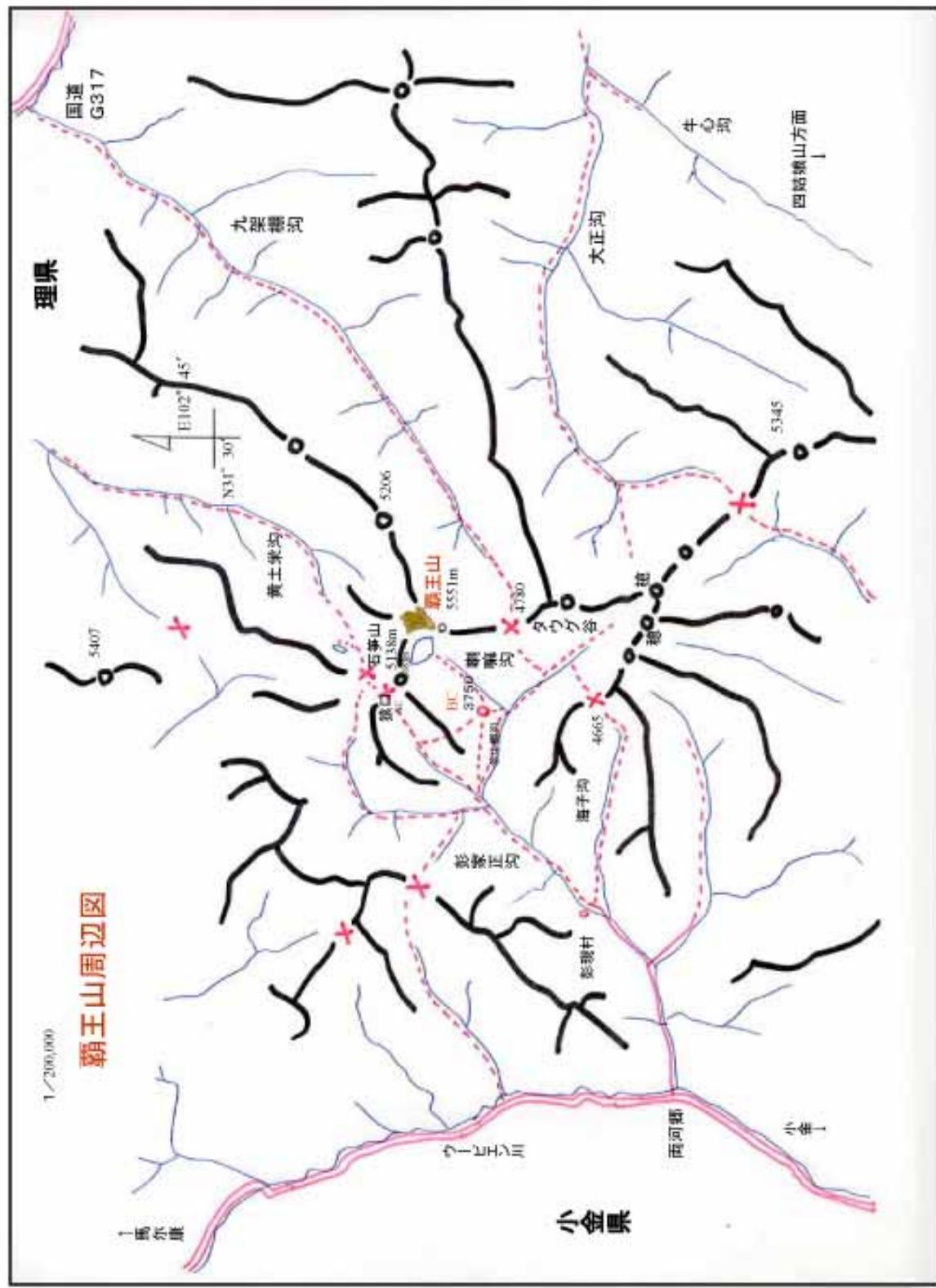
行動記録

(登攀隊)

9/22	土	広島発(上海経由)中国 四川省の省都 成都国際空港着。花園城大酒店、泊
23	日	成都～雅安～狭金山経由で小金(シャオジン)市へ
24	月	彭現の村長宅(3200m)到着。裏山の尾根に登り霸王山を偵察。とりあえずのルートを模索・決定
25	火	学術隊、BC設営(3780m)。登攀隊は別の角度から霸王山を偵察するため南側の海子峠を目指す
26	水	登攀隊(4660mの峠を越え、タウグ谷に下り、BC近くでビバーク)。26日午後にBC入り
27	木	登攀隊 名越、吉村、ガイド唐、通訳鄭で、AC(アタックキャンプ)候補地の偵察。松島高山病で休養
28	金	全員休養、装備仕分け等
29	土	登攀隊はアタックキャンプ(AC4700m)設営。4925mのコルに上がり登路を決定。高所順応のため宿泊
30	日	BCに下山、午後休養
10/1	月	BCで休養
2	火	午前中は雨、予定を変更し午後よりAC入り
3	水	10月3日7時、ACより一気のアルパインスタイル。落石におびえながら別山コル 5100m、イグアナのコル 5200mより岩稜登攀開始、ACから12時間行動で19時半、登頂。60mザイルで岩10P、雪稜4P。
・	・	暗闇でのラッペルは危険なので、雪稜下 5500mにて着の身着のままのビバークとなる(21時半)。
・	・	夜は寒風が吹きつり、朝方-8度以下まで冷え込んで岩壁一面霜で真っ白になる。
4	木	ラッペル7Pでイグアナのコル、さらにラッペルとクライムダウンでレンゼを降りて 14時40分AC到着。
・	・	吉村はBCへ下山、名越と松島は田中・那須に合流。AC泊。
5	金	ACを撤収し4人で石筍山(5183m)にアタック。13時登頂。帰路に迷い救援要請。BC帰着 21時。
6	土	完全休養(吉村下山、帰国へ)
7	日	完全休養
8	月	松島・田中 通称「槍・穂」の真下(4600m)を偵察。名越 九架棚沟峠(4700m)偵察
9	火	全員で理県側に峠(4700m)を二つ超え霸王山北側の谷に入り、4490mの池(スースン池)に幕営
10	水	石筍(スースン)池 近辺を探索
11	木	石筍池～BCに帰着
12	金	荷造り
13	土	BC撤収、村長宅で昼食祝賀会、日降(リーロン)鑫昆賓館に宿泊
14	日	(名越・松島)四姑娘山北面偵察トレッキング開始。ムロオツエ幕営 (学術隊は日隆泊)
15	月	緑爾葱沟(曲温沟)偵察するも終日ガス小雪。羊満台登り口にて幕営
16	火	降雪(10センチ)のためトレッキング中止し、下山。日隆に宿泊
17	水	日隆～丹巴(ダンバ)～ゲータレン峠～塔公(タゴン:3800m)草原。出来たてのゲストハウス泊
18	木	塔公～雪の折多山峠(ウードュアシャン:4293m)～康定(カンディン) 龍頭沟温泉泊
19	金	康定～成都 花園城大酒店、泊
20	土	成都(自由行動)
21	日	成都→上海→広島

(学術隊)

9.22	土	広島空港発(上海経由)中国 四川省の省都 成都国際空港着	花園城H
23	日	成都～雅安～狹金山経由～小金県へ	小金川賓館
24	月	彭現の村長宅(3200m)到着。村長宅に近隣住民及び親族、10人程集まり、夕食しながら聞き取り調査。 村長宅	
25	火	調査隊9時出発 14時BC予定地到着(3780m)、馬8頭で2往復し荷物運搬。 BC設営	BC設営
26	水	午前中高山病順応の為 ゆっくり行動、調査に出た登攀隊を迎える。	BC設営
27	木	登攀隊のABC候補地偵察に同行、高山病順応不足の為(4300m)引き返す	
28	金	全員休養、調査隊思い々に現地調査に出かける。	
29	土	登攀隊ABCへ出発。調査隊4600mの山へ踏査に出発、15:54分帰着	
30	日	杉村、那須、近くの川で魚釣り、水温4度Cで魚影なし、田中、宮田花の写真、及び周辺踏査。	
10.1	月	登攀隊休養日。杉村、田中、那須、仮称げんこつ山(4400m)登る準備していたが天候悪く周辺調査。	
2	火	雨の為、登攀隊ABCへ午後出発。那須、石笋山写真撮影のため続きの尾根へ(4000m)	
3	水	8:00霸王山登攀支援の為、田中、那須ABCへ向かって出発、12:34到着、4時間氷河調査 19:30 登攀隊、霸王山初登頂の入電	
4	木	午前中、登攀隊を迎える準備と帰還の入電応対、14:40無事帰還 吉村さんBCへ	
5	金	ABC撤収し9:45出発 名越、松島、田中、那須、石笋山(スズシャン;5183m)へ。13:10初登頂 帰路ガレ場に迷い込み救援以来、BC帰着は20:47であった。	
6	土	完全休養日	
7	日	那須 馬に乗って4689mの草原の続いた山に登り、霸王山、石笋山の写真撮りに行く	
8	月	杉村、宮田、那須 仮称げんこつ山(4418m)に登り、霸王山の裏側の写真撮影及び植物調査。	
9	火	全員で理県側峠(4700m)を二つ越え霸王山北側の谷に入る。4490mの池(石笋池;スズイ)に幕営。	
10	水	石争池 周辺探索。1日中ガスの為、霸王山、石笋山 姿を見せず。	
11	木	テント撤収後 8:25出発 ~13:20、BCに帰着。洗濯及びBC撤収の準備。	
12	金	荷造り	
13	土	BC撤収、9:06出発~11:42彭現・村長宅昼食祝賀会14:30~17:20日隆(リ-ロ)着。 鑑昆H	
14	日	乗馬により、海子溝；朝山坪(チヨサヘイ?3645m)まで登り、四姑娘山観察に行く。 鑑昆H	
15	月	6:45出発～(小金経由)～理県(1905m)～茂県(1645m) 四川茂県国際H	
16	火	8:51出発～松藩県経由～雪空頂(セウカヨウ・5588m)～黄龍・3250m着 華龍山荘	
17	水	8:30出発、黄龍入場～彩湖・3630m 10:30～ケーブルカー利用下山(雪のため峠越え心配) ～15:00九塞溝・2195m到着 九塞溝賓館	
18	木	7:50九塞溝見物、最上流・五彩湖3160m雪であった。午後晴れる。16:50H帰着 九塞溝賓館	
19	金	6:30出発～ゾンセ経由～映 映秀980m～柴坪鋪ダム(ツヅブダム)経由～成都市。 花園城H	
20	土	成都市内見物、帰国準備、杉村総隊長主催中国人々に感謝の食事会 花園城H	
21	日	9:30・出発成都国際空港～上海経由～20:15・広島空港	



【隊員・スタッフ紹介】



杉村 功 (すぎむら いさお) 総隊長

1935年生まれ <支部長、医科学委員会>

広島では高名な外科医だが、今回その腕を発揮する場面がなくて本人もほっとしている。非常に細やかな気遣いをする人で、現地にても渉外で大いに助けられた。
ただ時折くりだすダジャレはかなり寒いので要注意だ。
(名越)



松島 宏 (まつしま ひろし) 副登攀隊長

1952年生まれ <遭難対策委員会委員長>

海外登山歴豊富。山遊びの達人で体力抜群。かつて理科の教師であった為か好奇心の塊であり、何事にもよく気づく実行の裏方。隊員最大の関心事である食糧担当でもおいしい宇宙食など調達して、夕食のテントを楽しい場にしてくれた。



名越 實 (なごし みのる) 登攀隊長

1948年生まれ <国際委員会委員長>

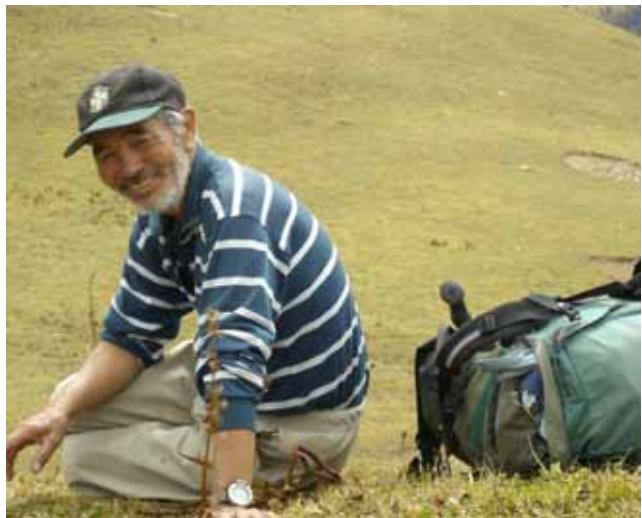
ヒマラヤを始め幾多の“初”記録を持つ。今次登攀隊名トリオの親分。小柄ながらいかなる困難にも打ち勝つ体と、目標を80%とし常に慎重な思考の上での確実な行動力の持ち主。このたびの登山隊の立役者として渉外、装備、会計などを担当する。(以下杉村)



吉村千春 (よしむら ちはる)

1959年生まれ <遭難対策委員>

最年少で登攀隊の重要メンバー。世界の山岳に多くの登攀歴を持ち、横断山脈へ通うこと十数回。今次遠征は短期間ながらもいい思いをしたようだ。主張をきっちりする半面ウイットに富み、場の雰囲気を和らげる温かい人柄。



田中勝彦（たなか かつひこ）踏査隊長

1939年生まれ <総務委員会副委員長>

豊富な登山とトレッキングの経験を生かして、細かいところにもよく気づき、素早い実行力で困難を解決する能力の持ち主である。後半のツアーリーダーをしていただく。高山植物に詳しく、キノコ類にも造詣が深い。



那須正義（なす まさよし）

1938年生まれ <自然環境委員>

筋金入りの企業戦士。土木の専門家であり岩石にも明るい。疲れを知らぬファイトマンで、隊の現地会計や種々雑用をこなして下さった。趣味も多く、一度太鼓の撥さばきを見たい。



寝袋の格差！自分（左）と登攀隊員用（右）

宮田賢二（みやた けんじ）

1939年生まれ <自然環境委員>

気象学の大家。今次登山活動中の局地での天気予報には大変な心配をかけ、また困らせた。
テントの外ではいつも空を仰ぎ、雲や風の動きを見つめ、首を痛めなければと案じた。
真面目、実直そのもの。料理、洗濯も得意とか。



村長宅。白壁は今年塗ったもの



村長一家と

<スタッフ>



左、妻の向さんは九寨溝の案内と通訳を担う

鄭 磊（ジエン レイ） 通訳・ツアーコンダクター

1981年生まれ。四川探検旅遊公司社員

顧客の要望を予測し満足させる能力があり、すこぶる優秀。春から秋にかけて四姑娘山現地社員をしているので高所にも強い。登山もするので、今次の行動食のアレンジから買出しまですべて任せたが大好評であった。

（以下名越）



徳富 誠（とくとみ まこと） 通訳・プロ棋士

1968年、山口県防府市生まれ

早期帰国する吉村のため急遽通訳兼渉外役として来てくれた。単身プロ棋士として本場中国で囲碁を教えていふとは驚き！

奇遇はあるもので、田中隊員の勤めていた某郵政省の囲碁大会で（アマチュアの）彼の兄にかなうものはいなかったとのことだから、彼の実力は推して知るべしであろう。

隊員みんなから「まことちゃん」と愛された



万 華平（ワン ファンピン） コック

1965年生まれ。四川探検旅遊公司社員

日本人の嗜好や耐辛度？を知り尽くしており、料理は申し分なく、毎朝夕彼の叫ぶ『ゴハンー！』が待ち遠しかった。



唐（タン）夫婦 については「調査報告」に詳しいのでここでは省略するが、彼らに出会えたことが今次学術調査で一番の収穫であったことは間違いない。

唐さんには当山域一帯のガイドをお願いしたが、まるで忍者のごとき身のこなしには誰も追従出来ず、脱帽。

夫婦のシンプルライフは『人間の生き方の究極』であり、「何も欲しいものは無い」「ヤクと暮らすのが一番の楽しみ」だ、という言葉には感動すら覚えた。

遠征日記

9／22（土）広島発、

MU294（9：00）～成都着（15：20）

大勢の見送りをうけて全員広島空港より出発。

上海にて国内便に乗り換えるが、ここで荷物を一個回収もれ。成都空港では通訳の鄭くんに早速面倒な仕事をしてもらうことに。その日の内無事、武士の刀ともいいくべきピッケル等入ったバッグが届く。始めから面白い遠征の予感！

花園城ホテル泊。夜は四川探検旅遊公司のオーナ張兄弟による歓迎会。（名越）

9／23（日）

成都発（7：40）～雅安～夾金山（4211m）経

由～小金市着（18：10）

通常は四姑娘山の望める臥龍峠～日隆経由のルートだが、現在工事中。成都から西に高速道を走り雅安～北上して夾金山を越えて目的地に近い小金市へ。このルートも悪くない。

鄭くん達は小金市は不案内とみえて宿を探している。公園の川寄りに立派なホテルのあるのを教えてやる。（なんと入口に古いキリスト教会あり）（名越）



ウーピエン川別れのチョルテン

9／24（月）小金市発（8：40）～彭現村着（1

1：20）

市場にて食糧等の買出しをして、3km東に戻って県道を北にウーピエン川を遡り三段地地区入口の両河郷バス停から東に村道を彭家正沟沿いに20分で彭現村村長宅に到着。

村長（正しくは村主任、隣左長さん）の家からは石筍山が沟の奥に屹立している。四川省登山協会のHPに掲載（石筍山登山計画）されていた写真はこの家の庭から撮ったものだ。

奥さん手作りの美味しい昼食をいたたく前に、みんなで裏山に登る。彭家正沟の奥、石筍山の右に一際高く雪を付けた孤高の嶮峰霸王山が圧倒的な南西壁をみせている。壁の左半分の中ほどに顯著なルンゼがくの字に落ちているのが唯一の登攀ルートとなりそうだ。（表紙写真）

今日は全員村長宅に泊めていただく。（名越）

9／25（火）彭現村発（7：30）～海子沟～峠（4660m、16：40）～タウグ沟（18：40）～ビバーク地（21：00）

学術本隊は今日冬牛棚沟のBC入りだが、我々登攀隊は南面の偵察をすべく本隊と別れてすこし引返し東へと海子沟をひたすら遡る。シャクナゲのジャングルを抜け草原を登ると石柱の標識が建つ峠に着いた。そこから見る霸王山南壁はアッシニボインをもっと立てた様な取りつく島のない壁に見えた。

このあたりの地形はどこも峠の反対側は一気に谷に向かって落ち込んでいるので下るのは早い（が、ちょっとやばい）。松島はかなり高所の影響が出てふらふらしているが、それでもムービーを回すことは忘れていない（よーやる）。そんなこともあってタウグ沟に着いた所で早めにビバークしようとするが、吉村は「BCでみんなと一緒にやりましょうよ」と言う。松島に歩けるか聞くと「頑張る」とのことなので、ヤクの足跡を追って月夜の強行軍となる。

しかし川の渡渉でついに二人とも足を濡らしてしまい、ギブアップ。おまけに僕はコッファ内のライターを税関で取り上げられたのを忘れていて、火が使えず最悪のビバークとなる。（名越）

9／25（火）晴 気温4°C 彭現村～BC

5：00 早朝寝袋の中、寒さで目覚める。村長宅周辺の畠は一面霜。

8：00 登攀隊、霸王山偵察の為出発。

9：00 学術調査隊4名、通訳2名、コック合計7名は、9頭の馬に装備品を積み村長宅を立つ。道路は意外と良く、川（彭家正沟）沿いに約3時間歩く。聞けば10数年前、大量の材木の搬出に使われた道らしい。両岸は柱状節理の岩の絶壁で、深い谷には見事な飛瀑そして清流は瀬と淵の連続……。また山々は針葉樹林と紅葉で飾

られ将に奥田元宋の世界だ。しかし乱伐により散在する流木には興ざめだ。

12:00 屋食後いよいよ急登にかかる。次第に低木から高山植物が生育する地域へ、青空も次第に広くなる。高度順化を考慮してゆっくりと登る。幸い息苦しさや頭痛は感じない。

14:00 やや広い丘陵地に到着。山裾の片隅に石造りの家屋、納屋等が建っている（後で隊の案内人夫妻の住居と解った）。すでに馬から装備品が下されており、ここがどうもBCとなるらしい。実は始めの計画でのBCは更に東へ約2km先の川辺であった。しかし、種々の理由からこの地が選ばれ、その後の隊の活動にとり何かと便利であった。

早速田中隊長の指揮のもとテント設営で、大テント（食堂・厨房・食品貯蔵兼用）と隊員用4張りが、そしてトイレも設置された。各自がテントで一段落して登攀隊の到着を待つも、結局全員集合はならず淋しいBC第1日目の夕食となった。（実はこの時間3隊員は、タウグ谷下り道のブッシュの中で大格闘していたらしい）

高原状のBCは、ヤク達の餌場でもあり、夜のトイレには足下の糞に要注意だ。またテラスの東端では、雪を被った霸王山の頂上が眺められる。夜は久しぶりにすばらしい天体ショウで、今だ体験したことのない無数の星の大集団の天の川が、今にも音をたてて流れ落ちてくるかの幻想の世界に引き込まれた。ロマンチストの某隊員がそっとつぶやいた。「この星空を彼女に見せたいなあ」と。（杉村）



BC建設

9月25日、のどかな谷あいに立つ村長宅を出発し、4,620mの峰を目指す。

パンジアチャンゴウに左岸に注ぐ、距離にして約10kmの谷を詰める。登攀隊員三名で、南方向から霸王山を偵察するのが目的だ。木材運搬の為に作られた谷筋の道を進む。所々がけ崩れはあるが、順調に高度を稼ぐ。

川沿いに伐採され、切り出された木材があちこちに捨てられている。伐採禁止令が出て、かたづけもしないで、立ち去っていったのか？

高度が上がるに従い、登高スピードが落ち、呼吸が荒くなつてゆく。峠近くに上つくると、景色も変わり、荒涼とした岩の世界となる。

いくつかの鞍部が有り、峠越えの判断に迷うが、一番近い鞍部を目指して登つてゆく。しばらく苦闘の後、峠の向こうに、まさに三角錐の霸王山が立ちふさがつていた。南に九つの尖峰を従え、なかなか登攀欲をそそる山だ。峠からは急な谷を下る。

何時の間にか、日は傾き、今夜中にBCへと急ぐが、道を何度か外し、ついに諦めてビバークとなる。

（吉村）



石碑の建つ海子溝峠より霸王山南面を望む

今回の遠征は神が色々と試練を与えた。

最初のそれは広島を出て四日目（9月25日）に訪れた。名越さん曰く「4千m位の峠を越えて偵察してBC入り」。軽く考えて出発したが、とんでもないことになった。一泊二日の準備、約10キロの荷で8時前に出発。昼頃4千mに到達、まだ峠までは遠い感じ。ええ？途中、石楠花の藪こぎを楽しみ、でも高度はどんどん上がっていく。霸王山を望む海子溝峠へはなんと17時に到着し、標高は4660m。「たっ、隊長！話が違います」とは言わなかつたが、自分の脳はいきなりの高所で酸欠に対応できず切れた感じがしている。4千mの順応には1週間かける人なのに、少々無謀だった。村長宅が3200mだから1500m上げたことになる。霸王山の眺めは素晴らしいが、偵察の任務は達成。今日中に暗くなつてもBCに入るぞ、と下り始めて体の異変に気付く。平衡感覚が壊れている。転倒せずに歩くことに必死の状態だ。二人にどんどんおいていかれ、薄暗くなりルートも失い、叫んだりわめいたり、醜態をさらす。19時谷底に到達。なんとしてもBC

へとライトを頼りに下るがヤクの踏み跡があちこちにあり、ルートが判然としない。フラフラで二人を追うが転倒の連続でズボンはヤクの糞まみれ。自分の状況がおかしく笑えた。21時、さすがにBC入りを諦めビバークに入る。さあ飯、と思ったらライターを忘れていた。水を飲み寝る。トホホ。霸王山からの谷の出会いの直ぐ上で寝たようだ。（松島）

9／26（水）ビバーク地発（7：30）～彭家正沟（10：10）～冬牛棚沟のBC着（11：10、3780m）

出発すぐに大きな沢に出て霸王山からの沢だと思いトランシーバでBCに問い合わせるもみんな初めての場所なので要領を得ず。地図と高度計からこの沢は学術調査予定地に続く九架棚沟峠より流れている沢だと勝手に思い込んで、BCの真下を通りすぎてどんどん廃道を下ってしまい、なんと彭家正沟に合流してしまった。

しかたがない、本体が辿った道を登り返し冬牛棚沟に向かう。途中で荷上げ帰りの馬に合う。かなり疲れてBC到着となつたが、夜は盛大なBC開きの宴会となる。

（名越）

翌朝、谷を下りすぎてしまいBCまでに結構きつい登り返しを強いられる。初体験の急激高所順応トレで私は二日間寝たきりになった。それにしても名越、吉村両氏の高所における強さには呆れた。尊敬しますわ。休んだ二日間で順応も進み、腎機能も回復、尿量も増え、むくみもとれた。アタックできる体になってきた。（松島）

26日、朝食も程々に、本流を下る。

霸王山から降りている谷を探すが、判断を間違え、パンジアチャンゴウ右岸の道を下流に下っていった。しばらく歩き、名越隊長偵察時のBC分岐点に到達。

それからは、昨日の高度順化が利いたのか、早足でBCに到達した。夕食の折、杉村総隊長以下全員元気でBC開きを行つた。（吉村）



BC開きの宴。賀茂泉と高所に酔う

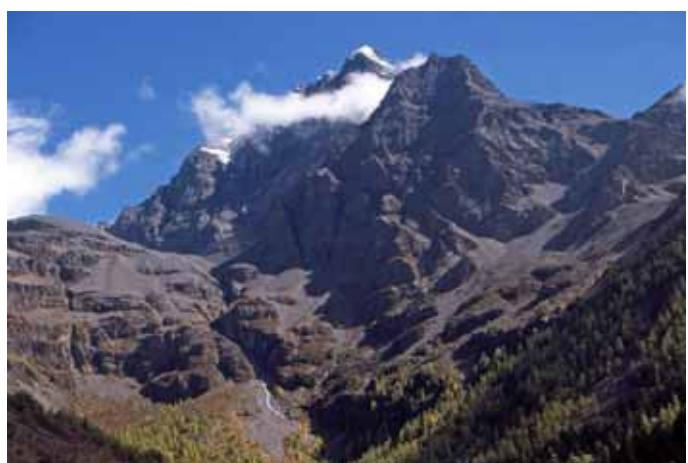
9月26日

BCで迎える最初の朝。肌寒い。温度計を見ると1°C。霸王山の偵察のために別ルートからBCへ入る登山隊と昨夜から交信が途絶えていたが、8時によく交信がつながる。ただ、現在の場所がはっきりしない。BC下の川沿いらしいが、私たちも初めてなので、ここまでどのように登ってきたらいいのか指示できない。私がブラブラ出歩いている間にBCに到着。（10時25分頃）昨夜は、道がわからなくて夜9時まで行動し、ライターもなく大変だったらしい。まあ、なにはともあれ全員BCに終結。

午後1時すぎから、1人で北側の尾根へ出掛ける。斜面には、ナナカマドの仲間の白い実、メギギ科の紅葉が彩りを添えている。リンドウも何種類も小さな群落をつくって点在している。途中、4200mほどの所で出会ったダイオウ属と思われる草丈3mくらいもあるタデには驚かされた。低い草ばかりのなかで飛び抜けていた。もう枯れかけていたが、初めて目にする種類だった。

2時間ほどで4380mの丘に着く、奥にはまだピークが続いている。BC下の谷奥には、三つの鋭い山が聳え、そこから霸王山へいくつもの山が連なっている。雪をかぶつた霸王山が青空に素晴らしい。どのルートを登るのだろうどこも厳しそう。ついでに、あとで登ってみようという、5183m峰のルートも探す。ここからの映像も初めてだろうとビデオを回す。

西側の広い草地の尾根をのんびり下る。ヤクが10頭あまり群がっている。17時BCに帰着。（田中）



喇嘛沟の奥に霸王山が聳える

9／27（木）松島除く全隊員と唐、鄭でAC予定地へBC発（9：25）～ルンゼ途中にて杉村、田中、那須BCへ引返す～AC予定地4700m着（14：30）発（15：20）～BC着（17：40）
名越さん達と約5時間をかけて、約15kgの荷を持ってAC予定地に登つた。ACは霸王山から石筍山に至る氷河モレーンの干上がつた氷河湖の上に決める。

持ち上げたテントや登攀具は岩陰に隠し、下りは喇嘛沟右岸の尾根づたいリレートにする。モレーン下の大伽藍を忍者のように舞い降り、尾根を斜めに走り下りる唐さんに3人必死でついて行き、BCに帰り着いた。（吉村）

この日は天気はよく、登攀隊のAC候補地偵察のため、9時25分全員BCを出発。しかし高所適応がまだ十分にできていない宮田隊員は、途中で他の隊員と別れて霸王山の前面にそり立つ絶壁のふもとを目標にしてトレッキング。途中で行動食の昼食を摂った後、13時22分頃、崖のふもとまで何とか辿り着く。少し体調が改善されてきたかなという感じ。13時36分下山開始。14時20分頃、高所順応不足のため引き返してきた杉村、那須隊員と出会う。16時頃BCに帰る。その後、偵察隊も所期の目的を達して帰還。（宮田）



寝床を取られた？ヤクたち

9／28（金）曇りのち晴れ

昨日ACへ踏査を行ったのと、二人の隊員が高山病の余韻が残っておりゆっくり休養の日である。10時30分テントの横にある大きな石（5m×3m×高さ1.5m）の上で、近くに住む唐さん、黄さん夫婦が、ヒマラヤ杉の青い小枝を積んで火をつけた。霸王山に向かってお祈りを始めた。



ひなびたタルチョと古い石造りの家屋がマッチして、幻想的な雰囲気だ。月に二回程行うらしい。

皆さん、写真に収めていた。天気が良いので洗濯する人、山へ花の写真撮影、高い山に見入って瞑想に耽るノンビリした一日でした。（那須）

9／29（土） 晴 気温9°C BC

8:00 登攀隊AC設営の為元気に出発。

8:15 田中、那須、杉村隊員高所順化を兼ね、BC裏山より尾根を登り周辺調査をする。

12:40 4603m峰着。ここから霸王山の南面の様子はっきりと見え、頂上の雪が少なくなっている、又石筍山のきびしい山容も解った。途中山火事による無惨な焼け跡あり。植物に詳しい田中隊員から、目につく高山植物の説明を受けたが、「花の心にならなければ……」の一言が草花を知ることに大切であると教わった。またチョウやバッタなど昆虫や鳥類、ウサギ、イタチ等小哺乳動物の存在も確認でき、この地域が意外と生物にとって良い生活環境であることを知った。4000mの高地で冬期は積雪もあるが、川や地下からの豊富な水量と適当な数のヤクの放牧とが今の所自然のバランスを保っているのではないかと愚考しながら下山した。

16:45 BC帰着。（杉村）

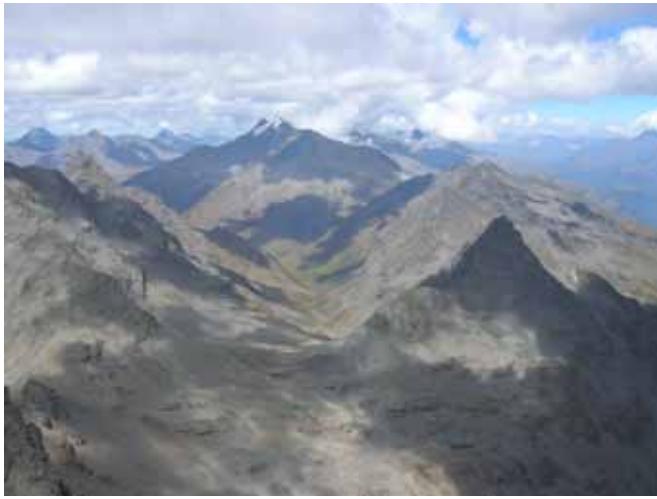
9／29 BC発（8:00）～ルンゼ入口（11:00）～

AC（アタックキャンプ）着（13:35）4750m
三人そろい踏みでAC建設へ向かう。連日の好天で霸王山はすっかり日焼けてしまい雪の肌はどこへやら。

先日のデポを回収してACを建てる。小さな氷河湖の干上がったフラットな砂地が絶好のテント場を提供してくれている。JACの海外助成金をはたいて買ったアタック用のテント（マウンテンハードウェア：9万円強！）なのだが、生地がエントラント系で（フル4シーズン）内側に水滴が溜まり、たまりません！いや溜まるんだって・・・。

とりあえず美味しいスープなど作って一息入れると、霸王山は落石狂想曲で我々を歓迎してくれる。音楽は村長宅の裏山から見て日星を付けていたあの大ルンゼから聞こえてくる。だんだん葬送曲に聞こえてきたので大ルンゼルート放棄！

霸王山と石筍山の間に化石のようにへばり付いている「はまぐり氷河」を遡って北西尾根と付近の偵察をする。峠（4925m）よりの景色に息を呑む。何というかまるでグランドキャニオンを大きくしたような感じで、こちら側とは打って変わった荒涼たる赤茶けた風景の中に様子の良いピークが連なっている。



北面にもいい未踏峰が連なっている

おっと、そっちを見とれている場合ではない。登攀ルートの偵察じやあ！

北西稜はミックスで何とかなりそうだが、頂上までが長い（頂上は南の端にある）。小ピークを何個も越えていくのはいいが、帰りが読めない。

A Cに戻る途中から南陵がスカイラインで見え「掛かってきなさい！」と言っている。そうだ下りは南陵にしようと思いなら A Cに戻ってさらによく考えると、この山は北に傾いていたではないか。ということは南陵は順層で、登攀にもってこいなのだ。

躊躇せず『掛かっていく』ことにする。

今日は松島の順化のために一泊して B Cに下ることにする。吉村がなんか言うとるが無視。

（名越）

【魚釣り残念記】

9／30（日） 晴 気温8°C 自由行動日

10:00 那須隊員と B Cから東 500m下った川（彭家正沟本流）へ釣りに出発。餌は前日唐さんの畑で取ったミニズ（中国でも蚯蚓（チョウイン））で5cm大、元気も良く問題なし。早速準備した仕掛け（道糸 1.0 号、ハリス 0.8・0.6 号、重りカミツブシ、アマゴ鉤7号）に餌をつけポイントに投入する。川に垂れ下がった小枝や流木に仕掛けかかるないよう 4.5mの愛用のヤマメ竿を伸縮調整し、またミチイトも 2m余と短くして、ここぞと思うポイントをせめる。しかし当りがない（那須隊員も同様）。正午まで2人で根気よく上流に向かって仕掛け餌を換えて試みるも釣果なく、残念な結果となった。川は清流で水温は日中でも 4°C であった。また水中の石を拾い裏についている川虫（2種）も確認したが、いずれも 1cm未満で餌としても役立たず、資料とし持ち帰った。

実はその後、10月6日は早朝から、又 10月13日は下流の彭現（村長宅近く）でも試みたが、いずれの川でも魚

影なく、結局今回釣果はゼロとなり、新種発見の夢も水泡と共に消えた。

反省するに、この流域には本当に魚は居ないのか、季節が遅くすでに移動したのか、いや小生の腕の悪さなのか等々、要因は考えられる。是非今一度チャレンジしてみたいと思っている。その時は釣りのみならず、置カゴ、網等の方法も試みて、この川の魚種や食性などを確かめたいものである。



竿と餌それに腕も？完璧なはずだが・・・

実は現地での魚や釣りの情報を入手することは殆ど皆無なのだ。それはチベット系住民に魚食の習慣がなく（ヤク、ウシ等の肉食が主）むしろ魚は不吉なものとする風習があり、或地方では魚釣りも禁止されているとのことであった。

しかし漢民族は別で、山間の街でも魚専門店（コイ・ナマズなど）もよく目につき、我々も何度かおいしい魚料理を食べる機会があった。また成都の近くでは養魚場もあり、岷江（揚子江支流）では釣人も散見した。

（杉村）

9月30日

今日は終日休養。各自思い思いの行動。

杉村さん、那須さんは下の川へ魚釣りに、残念ながら釣果なし。水温が低すぎるためか、魚影がなかったとのこと。

花の写真を撮りに B C北側の斜面などを歩きまわるが、探すときには少ない。NHKから頼まれたビデオにも少しほうが良いと思うのだが、なかなか上手く撮れない昨日から荷上げに A B C に行っていた登山隊も帰着。夕映えの山々の写真を撮ろうと出かけたが、雲がかかっていて駄目。

今日、唐さんから霸王山のチベット名は、トゥオニュオンディオン（菩薩の山）であることとその言い伝えを聞いた。（田中）

10／1（月）雨、霰、雷

前日の夜から気温が少し高めになるという変調が見られていたが、この日の午後から一転して気温は低めとなる。湿度は高めになり、やがて17時頃から猛烈な雨、あられが降ってきた。雷も鳴るなど、この遠征で最も悪い天気となった。この日が登攀隊の休養日になっていたのは幸いであった。杉村、田中、那須隊員は、仮称“げんこつ山”（4400m）に登る準備をしていたが、天候がわるく周辺調査を行う。（宮田）

10／2（火） 小雨のち晴れ

登攀隊7時出発の予定で全員5時半頃起きた。キャンプを張って始めての雨だ。一気に登頂を目指す予定であったので、隊長の判断で1日延期と決めた。時間が経つに従い天気が回復して周りの山が見えてきた。同じテントで寝泊りしている吉村さんが、1日も早く帰国したいのかイライラしている。11時頃今日中にACまで行こうと隊長に進言していた。



総隊長の激励を受け、勇躍出発！

13時20分 我々調査隊と中国人スタッフの見送りで、出發して行った。

調査隊は各々単独行動で調査した。

15時頃、中国人の若者7人（女二人）が馬一頭に物を積んでやってきてテントを張った。四川省登山協会がマネジメントした石筍山3日間トレッキングツアーらしい。高所順化が出来てないので登頂は無理と思う。夜賑やかに騒ぐだろうと覚悟していたが、長旅の疲れと、薄い空気の為か、早く寝たようだ。

（那須）

10月3日

そのときBCでは・・・



10／3（水） 天候曇り 気温 9.3°C BC

6:00 起床。昨日、一昨日と2日の雨は、宮田予報官を悩ませ、隊員らは登頂を前に不安で空を見つめている。ACも曇りらしい。

7:00 ACから入信「登攀隊全員体調良好でこれより出発します」と。「十分気をつけて下さい」BCからも送信。

8:00 田中、那須隊員、鄭（通訳）、唐（現地ガイド）4名、BCを出発しACへ。

8:15 「4800mのコル近くで、好調に登攀中、下は雲海です」の入電あり。

9:15 受信あるも感度不良にて内容不明。午後よりBCは好天となる。山頂の天候はどうか案じる。

15:10 「頂上まであと200m余りで、ビバーク地点にテント装備を置き、目下アタック中です」と連絡がある。

19:00 「頂上にもう少しで到着です」と入信。BC周辺は夕闇に包まれており、次の連絡が待ち遠しい。

19:30 名越隊長から「頂上に到着しました。これからが勝負です」の朗報。この瞬間を待っていたのだ。すぐにBCからも「登頂おめでとう。是非気をつけて降りて下さい」と励ましの返電をした。直ちに宮田隊員、徳富（通訳）、萬（コック）らにも登頂を知らせ共に喜びを分かちあつた。しかしその後も続報を待っていたが、遂に入信なく、ビバーク地点まで事故なく下山できたのか、きびしい岩場での様子が想像され「もしかして… …」との不安で一睡もできなかった。（杉村）

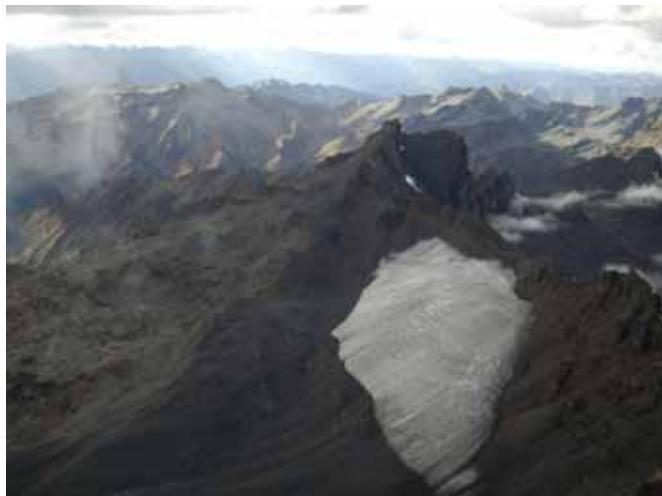
登頂記

10月3日

AC発（7：00）～別山コル5100m（9：15）
～イグアナ岩のコル5200m（11：00）～霸王山
頂上5551m（19：30）～南岩稜の頭5500m
ビバーク休憩（21：00）



登攀1ピッチ目よりイグアナのコルを見下ろす



はまぐり氷河とその上の石筍山

初登頂そして試練

名越隊長からの指令で登攀部分の最初は私がリードすることになっていた。120mのロープと登攀用具を個装に加え結構な重荷で7時ACを出発。別山のコルまではなんなく登る。

稜線通しは悪すぎるので諦めACの反対側を下りイグアナのコル(5200m)に登り返す。ガラ場をかなり下り岩稜に戻るのがしんどかった。ここから私の仕事が始まるのであるが、ここまででもうバテていた。ロープもいらないくらいの緩斜面を5ピッチリードする。技術的になんてこ

とはないが、二人のロープを同時に引くのはしんどい作業で休む暇がない。壁が急激に立ち始めてトップを吉村氏に交代。

斜度は70度から場所によっては垂壁となる。荷物を担いでハーケンを回収しながらのフォローは本当にしんどい。スピードが上がらず、随分と待たせて迷惑をかけた。誰かの提案で幕営用の荷物はデポし軽くして登りスピードを上げよう。この調子なら登頂後下りてきてビバークできる。なんて甘い考えはやはり神の怒りに触れ、次なるきつい試練を呼んだ。吉村氏の担当した5ピッチは時間がかかり垂壁部分から頂上に続く稜線に出た時点で19時。日没となった。赤い夕焼けがきれいだった。

19時半、真っ暗の中、岩稜はやがて雪稜となり名越隊長のリードで頂上に達した。初登頂は生まれて初めて、嬉しかった。感動した。BCとの交信、写真撮影と儀式を済ませ下山にかかる。



頂上の吉村（左）、松島（右）

緩い岩稜から懸垂下降に移る場所で隊長にビバークを進言した。暗い中、支点作りも困難だし、落石も怖い。ルートもよく見えない。私は98年の天山遠征で7千mの瀕死のビバークを経験しているから臆病だ。幕営用品をデポする時、シュラフカバーと防寒用品をザックに忍ばせておいた。私はハンギング下の雪の上に石を置きシュラフカバーに入りハーケンを打ち自己確保した。辛く長い夜が始まった。二人は岩尾根のくぼみに入り込んだようで姿は見えない。二人に若干の装備を渡して夜を迎える。自分には一枚のシェルターがあるので朝まで生き延びる自信はあった。しかし二人は着の身着のままなのでマイナス10度で風のかなり吹く状況は凍死の危険性が高い。一晩中一睡もできず震えていた。最初は行動食を食い続けた。時々雪を掴んで口に運んだ。砂が口の中で音をあげた。どうやってもどこを抱えてもさすっても寒いので諦め、妄想を始めた。縁起でもないが、朝一人が冷たくなっていたら、二人が冷たくなっていたらと、対策を真

剣に考えていた。朝二人が生きていたので事なきを得たが、昨日カラスが我々の頭上をしつこく旋回していた理由がそのときわかった。彼らはあの稜線上で我々がのたれ死ぬことを確信し物色していたらしい。最悪の想定として、二人が凍死したら私一人では下ろせないので裸にし鳥葬！そしていつか骨を拾いにと考えていた。真剣だったから笑える。

(松島)



積み木の様な南岩稜

アルピニストの幸せ

10月3日、ACから偵察していた、イグアナのコルに向け出発する。

今回の登攀は落石との戦いだ。リスクを回避する為、当初予定していたレンゼルートから南稜にルートを変更した。雪や氷が融け、不安定になった山肌は、少しの衝撃でも崩れてしまう。

慎重にしかも大胆に高度をぐんぐん稼ぐ。9時過ぎに、一つ目のコルに到着。稜の東側を巻き、11時に第二のコルに着き、ここで、登攀に不要なストックなどを少しデポする。

松島さんがまずトップで、登ってゆく。登るに従い、傾斜が立ってくる。



堅いが傾斜は立っている西壁側を登る

5P登ったところで、私と交代。登山靴をフィーレに履き直し、気合いを入れ、攀じる。トップで落ちないよう、落石をしないよう、慎重に登り、確実な支点を作る為、重いアイスハンマーを振るう。圧倒的な高度感も出てきて、クライミングの醍醐味に酔いながら、夢中で上を目指す。

ふと、20台半ばで登ったヨーロッパアルプス・ノアル針峰南稜登攀を思い出した。若い頃より確実にスピードは落ち、自信も無いが、この年まで続いている自分を不思議に思う。一度セカンドの松島さんが、浮石を掴みザイルにぶら下がるが、事無きを得る。6ピッチ終った所で、トップを名越さんに代わる。もう岩壁の傾斜は落ち、後は雪稜を辿るだけだ。

19:20ようやく憧れ続けた山頂に辿り着く。写真撮影や交信をして名残り惜しい山頂を後にする。岩稜の頭まで下り、おのおのビバークサイトを見つけて、横になった。

着のみ着のままの厳しいビバークではあったが、朝焼けに浮かび上がった四姑娘山（15年前登頂）のシルエットにうっとりし、アルピニストとして幸せを噛みしめた。

(吉村)



朝の四姑娘山方面

頂で震えて

昨年喇嘛溝からガスの切れ目に垣間見て予想していた“別山とのレンゼから南面に出ての登攀”という読みは（最終的に）ほぼ当たっていた。このたび最初、村長宅裏山からの遠望では西正面壁左の大レンゼを予定したが、連日の好天で見る間に壁の雪は解けてしまい、AC建設&偵察時点では正面壁は落石の巣と化していた。次いで候補に挙がったのは北西壁から稜線を辿る案であったが、往復に時間が掛かりすぎることが予想された。特に下りが読めないと危険率が高くなる。見ると壁は北西に傾いていて南稜は順層だ。これは下りに使える！いや、たしかに傾斜は強く『かかってきなさい』ルートなのだが岩稜なので落石も比較的少ないはずだし、トップは空

身でラバーソウル靴を履いているから登れないことはない。下降はラッペルの連続でいけそうだ。2時間後には初期通りの「南陵ルート」と決めていた。帰国を急ぐ吉村は「このまま明日はアタックしましょうよ。なにか問題がありますか?」などとアホなことを言っているが、松島はやっとその日AC入りしたばかりだし、上がってない装備もあるので予定通りBCで2日休養して、次の日ACを経由して別山のコルに泊まり、一気に頂上を落としてコルまで降りる。という作戦に戻る。はずだったのだが、休養2日目の朝雨が上がると、吉村の「昼からACに上がりましょうよ」の言にとりあえずACに泊まることとなる。



ACより西壁を見上げる

10月3日 7時出発

そうなると当然次ACからのアタックとなる。暗闇で落石を受けたくないで明るくなって出発。正面壁の下をトラバースし、ビビリながらガリーを2つ抜けて別山コルのルンゼに入る。左俣のイグアナ形ピークが南稜に近いが安全を取って右俣の雪渓を登る。別山のコルは砂礫地でテントを張る場所もあり、雪も近くにある。しかしまだ10時なのでどうしたものかと、とりあえずビバーク場所を物色している間に(盛りのついた)二人はさっさと右下に稜線を回り込んでしまい、呼べど叫べど返事など当然あり得ない!仕方なくそのまま全荷物を背負ったままついてゆく。

頂上まで(60mロープで)12ピッチと読んでいたので、一人4ピッチの担当とする。高所順応が(二人より)遅い松島を最初にして、次を順応済み?でルート開拓の経験がある吉村、雪が出てくる最後はミックスの得意な名越というオーダーにした。

スカートの髪のような鞍部リッジを巻くこと1時間でイグアナ岩に着く(5200m)。ここから南稜が始まる。特注の最高級ロープ(8.2mmφ×120m)を二つ折り(ドッペル)にして、松島が行く。バリバリに尖った

積み木(岩)を落とさないようにしているのは見ていても分るが、容赦なく手のひら大の砲弾が飛んでくるのを除けるのが精一杯でムービーを回す暇などない。しかし早くも2ピッチ目にまたもや吉村の「こんな重たい荷物を担いで登るのは意味がないから(時間が掛るから?)置いていきましょうよ」の声に「そりやあどういう意味や?」と言ったものの“当然ビバークになるじゃろうがこのところ夜は温かいので適当に座って寝れるじゃろう。旨くすれば吉村の主張するようにデポまで帰つてこれるかも・・・まあえか”との甘い判断をしてしまった。まさか地獄のビバークになるとは知らず。(そういえば入山日も、海子溝峠を下りた所で「BCでみんなと一杯やりましょうよ」に負けて夜道を彷徨い続け、結局ナマ沟手前で惨めなビバークをしたのだった)

キャンプ食と用具類の殆どを3ピッチ目のテラスにデポし、登攀具のみで身軽になった松島は5ピッチを順調に稼ぐ。続く吉村は浮石の多いリッジを避けて左の垂壁を果敢に攻め上がる。気持は分るけどちょっとやりすぎー! プラブーツ履いて荷物背負ったセカンドの身になつてよ(ほら落ちたでしょ浮石掴んで)。5ピッチ終わった処で僕の番になったが、見るとあと半ピッチで岩壁は終わりそうだし5ピッチ目は半分も伸ばしていないので(それにラバーソウルシューズに履き替える時間が惜しい)そのまま行かせる。



頂上稜線のガレ場を行く

吉村の待つビレ一点に着くとすでに日は落ち始めて18時過ぎだ。そこからは雪交じりの岩稜だが斜度はがくんと落ちて、アイスキップの頂上に続いている。勿論アイゼンは要らない。途中ビレーが取れないので慎重に2ピッチ伸ばし、ロープを解いて軽いラッセル100mほどで頂上へしきたおやかなピークに着いた。すでに日は落ちて石筍山の向こうに紅を引いたような茜が残っていたが松島が着いた時には夜の帳が下りていた。19時30分。朝から12時間半の連続行動だった。霸王山は信

仰の山で、唐（タン）さんや村長たち村人が崇めている神聖な頂上を足下にすることは憚れるので5m手前（高さにして50cm）にて登頂とする。登山を許して貰つたことだけでも有難いのに仏様（菩薩）の頭を踏むなどという土地の人々の気持ちを踏みにじるようなことをやっちゃあいけんだろう。



5m手前の初登頂（右下が頂上）

3人でガッチャリ手を握り合うとさすが胸にこみあげて来るものがあったが、下りのことを考え気分を引き締める。暗闇の中で写真を撮りあったりして20時、下りにかかる。5500mの岩稜終点からラッペルに入ろうとするが、リッジとはいえ真っ暗ではさすがにやばいので、ここでビバークとする。BCに連絡取ろうとするが、まったく反応無し。「もう寝たんじゃろう」ということにしたがどちらかのシーバーが高度障害だったと思われる。だがこの風は何だ！あまりに寒いので吉村が登ってきたガリーの方（西面）に風を避けて移動するが、そこも雪の付いた岩棚しか無くあまりに居心地が悪いので、松島に手袋を借りて元のビレー一点に戻る。岩屑を掘って棚を広げ半洞窟状態になった所に横たわって体を嵌めこんで胎児のように丸まって少しでも風を避けようとしているのだが、顔面のフードから入り込んだ寒風はヤッケの中を一回りして容赦なく熱を奪っていく。ああワシの熱う～！

ザックの中身を全部出し半シュラフカバー（こんなもあるか？）にする。足捌きを考慮してヤッケは履かず、下半身は薄いストレッチのクライミングパンツのみで、事もあろうに通気性が良かつたりして、ザックに入つても蒸れなくていい（わけねーだろー！）。せめて靴を履いていたいのだが、それでは足がザックに入らない。礼儀正しく？ プラブーツを脱いでペラペラのザックに入る。下はこんなもんでガマンするが、手が冷たいよ。農作業用のゴム手袋を外して松島が貸してくれた薄手袋とオーバーミトンを付ける。ザックに突っ込むと手は楽になる

が、風が下半身に入るので、カンガル一体制で耐えることにする。さすがに後日手の皮が剥けたところをみると軽い凍傷になったみたいだ。



JACの旗を忘れ、頂上で岳連の旗？を掲げる松島

しかし前日までとは打って変わって一晩中寒風が吹き荒れ、気温は-9度あたりまで下がった。もちろん一睡も出来ず歯の根を鳴らし続けていて、「もうわしには永遠に朝が来ないのではないか」とさえ思った。ガリーも風が吹き出したとかで戻ってきた吉村がゴソゴソしているので「何時やー？」ときくと、まだ0時との返事（ああ一くんじゃなかった・・・）「何か暖かくなる方法はないですかねー？」だって？あのね千春ちゃん、それを知つたらわしはこんなに震えとらんのよ・・・そして長いながら絶望の夜は明けた。遠く南南東に茜の空を突き上げる四姑娘山群の眺めはあまりに見事で、ひととき寒さと空腹を忘れるほどだった。そして岩場一面が真っ白な霜でコーティングされているのを見て、昨夜の冷え込みの強さを知った。さすがの吉村も「僕のせいで寒い思いをさせてしまってすみませんでした」と言っている。



朝～！ 生きてました・・なんとか

10/4 (木)

明るくなるとすぐにラッペルを開始した。ハーケンを打っていた吉村が「目が見えんようになりました」と言う。昨年白内障の手術をしているので高所で影響が出たものと思われる。比較的元気な松島に行ってもらう。登攀ルートは無視して、岩稜を忠実に下る。霜でカリカリにコーティングされた岩はなかなか融けずトップを降りる松島はこけまくっている。



別山を見下ろす。手前の岩は霜で真っ白に

途中デポを回収し、なにはともあれお湯を沸かして爆飲する。干からびた喉を潤し目を閉じると一気に睡眠世界に引き込まれる（1時間の大休憩）。



お湯を沸かしながら実は寝ているのです

特注 120mの一本物ロープは大正解で、ラッペルでは致命的な引っかかりや落石は起こさずまあ順調にイグアナのコルに降りつく（7ピッチ）。別山のコルまでは戻らず、イグアナ岩から急峻なルンゼをさらにラッペルとクライムダウンにてなんとかAC帰還を果たす。

これまで多くの遠征を経験している二人だが、これが初めての“処女峰”であったとのこと。

ちょっとサブーい目に遭ったけど、“終わり良ければ”で、まあえかったよね。
AC手前のモレンを上ると、そこには田中さんと那須さんの笑顔が僕たちを待っていた。



ACからの登攀ルート



登りました！そして帰りました（AC帰還）

10/4 (木) 晴 気温4°C (B C)

やや寒い朝、結局トランシーバーONで一晩中待つも入信せず心配する。

7:00 定時交信も応答なく、AC田中隊長とも連絡とれず。心配で朝食ものどを通らなかった。

8:55 登攀隊長から「無事下山中です」とやや疲れた声で入信あり。

15:00 「14時40分 ACへ全員到着しました」との連絡をキャッチ。やっと安心し、肩の重荷が取れた。そしてBC残留組も始めて心から無事下山を喜ぶことができた。

(杉村)

10月4日 (A C)

ACの朝はさすがに寒く、-2°C。おまけに東に霸王山があるため日当たりが遅い。近くの氷河湖も氷が張っている。

午前中はずつと山を眺めながら登山隊の姿を追う。時折小さな点が見えるが逆光で見えにくく、10時半ころ中間のコルあたりを最後に見えなくなった。

帰りが遅く少しいらいらしていたが、14時すぎガレ場を下ってくる3人がはっきり見える。湯を沸かして帰りを待つ。到着をビデオに収めようと撮影していたがもう少しというところでテープが終り残念。

14時40分無事到着。おめでとうそしてごくろうさま。

脱水がひどいらしく何杯も水分をとる。吉村さんは一足早く帰国するため、今日中にBCに下りると休憩の後下山。目を痛め見えにくいとのことで少し心配していたが無事BCへ。

登頂の話などを聞くが、とても厳しいビバーグで随分疲れている様子で早めに就寝。

(田中)

10月3日、昨日BC(3780m)を出発した登攀隊が、今朝7時にACを出発した旨の連絡を受け、8時に田中学術調査隊長、唐(タン)さん(地元住民・ガイド)、鄭さん(通訳)と、4人でACに向かって出発した。喇嘛沟(ナマゴウ)を遡り、2時間程、樹林帯、草原を過ぎると最初は直径1.5m前後のガレ場であったが、だんだん小さくなって40~50cmのガレ場ばかりだ。足場が悪い上に、空気が薄くなり息がきれる。ガイドに、元気な田中さんと若い通訳が接近していくと、益々早足になり、ガイドの通った足跡が判らなくなる。周囲の景色の観賞はおろ

か、前の人影を目で追うのが精一杯だ。一寸脇見をすると足を踏み外してでんぐり返る。大息、溜息、虫の息、息絶え絶え登った。それでも予定を1時間余り短縮して、12時30分にACに到着した。丁度其の時、登攀隊の話声と共に、岩場を登っている姿が目撃出来た。唐さん、鄭さんは明るい内に帰着したいと、帰っていった。

4時間程、田中さんと二人で氷河及びその周辺調査、写真撮影を行った。夕食後、気温が下がってきたので、早めに夕食を食べ、シュラフに潜り込んだ。高い山に囲まれ、早めに暗くなつた19時30分頃無線が入つた。名越隊長の元気な明るい、登頂成功の声が飛び込んできた。代わる代わる無線を交歓し、成功を称えあつた。山の崩落する音が一晩中続いていた。

高山病予防に、ダイヤモックスを朝夕半錠飲んでいたのと、多めにとった水分、其の上に寒さの為、小便に5回も起きた。朝方、空気が薄いためか息苦しい。一晩中余り眠れてない感じだ。

4日の朝は-1度Cと、此方に来て初めて体験する寒さだ。頂上付近の寒さと、切り無しに続いている山の崩落音で、色々な事を想像しながら無線を待つた。10時頃、名越隊長より元気で下山中の無線が入りホットした。しかし正午頃、後1時間で下山出来ると無線が入つたが、13時頃から今迄双眼鏡で見えていた人影も消え、話し声も聞えなくなった。

13時20分頃、帰還ルートの方で一段と大きな崩落の音が聞えた。余計な想像を打ち消すのだが頭をよぎる。30分、1時間、2時間と待つのだが変化無し、不安がつのる。ようやく14時30分ガレ場にカラフルな服装とヘルメット姿を見付けたときは、緊張と安堵で全身の力が抜けるようであった。広島空港から用意していたペーパーで乾杯したのでした。

吉村隊員が帰国準備の為、16時頃BCに向かって出発した
(那須)



登攀具を脱いでくつろぐ3人と右端那須

石筍山初登頂！

5138m

10／5（金）

今日は石筍山へ。

昨日の予定では、那須さんと私は登頂後南西の尾根伝いにBCへ（一昨日、一緒に来た唐さんと鄭さんが下ったコース。4時間ほどでBCに帰られると言っていた）。名越さん、松島さんは一旦ABCへ戻り、登ってきた道を帰るということだったが、全員で南西に下ることにした。

二人とも少しばかり疲れがとれたらしく元気。テントを撤収して、9時55分出発。



そそり立つ石筍山を目指して・ルートは正面

二つの丘をこえて取り付きへ。少し登ったやや広い場所にザックを置き、少しの登攀道具だけで空身で登り始める。

11時35分。10mほどの崖の間を抜けると大小の石のガレの連続で、どの石も浮いていて歩きにくい。ただひたすら登る。

12時30分。頂上まで50mほどの崖の下に着く。このあたりからロープなどが必要と思っていたが使わなくてすみそう。最後に2mほどの岩を登ると頂上の稜線。岩を登るとき岩角を持つとグラッとしてギョットする。1m四方くらいの岩が何枚も重なっているがどれも浮石。



田中68才、那須69才の初登頂！！

13時10分頂上着。

頂上付近は、幅2mほど、長さ15mほどのはぼ水平な岩の台地。西端の50cm四方ほどの石が一番高そう。誰かがこの山を東の方から眺めてオッパイ山と呼んでいたので、その石にそっと手を置く。

氷雪も無く、登攀技術もさほどいらない山だけ初登頂はやはり気持ちよく嬉しい。しかしこの後の下りが大変だった。



はまぐり氷河と霸王山・右スカイラインが南陵

ザックを置いたところから西にトラバースして尾根に取り付く。いくつも小さなピークが連なっている。その岩稜の東側をトラバースしながら下るが、下の方が見えないので時間をくう。

4700mくらいのコルに着く。あたりには三つほどの石積みがある。この少し先には、先日登った4603mのピークが見えるが、そこまで二つのピークを越さなければならず、厳しい登り降りなので西側の谷沿いに下りて、途中から尾根に取り付くことにする。下ってもなかなか取り付き場所がない。谷は大きな石の重なりの連続で、足を置く度にグラグラしてとても疲れる。

4500mあたりから横切ろうとするが、今度はシャクナゲのブッシュがひどくて進めない。とくに名越さんと松島さんは大きな荷物のためとても苦労している。

このコースを下ろうと言った手前、責任を感じてなんとか早く尾根までと気があせる。更に200mほど下って、シャクナゲの疎らなところを探して横切って、二つの尾根を

越えて、やっと広々した尾根に出た。ここからは下の方にいつもヤクが群がっている場所が見えた。もう19時すぎ、薄暗いなか、やっと悪路を抜けることができた。

一人先に行って、尾根を横切って、下にあるBCの明かりを確認。ヤクの広場に下る。ライトの明かりにヤクの目が、ランランと光って薄気味悪い。BCからも私の明かりを確認したらしく、こちらにライトを向けていた。三人がなかなか下りてこない。松島さんが転んで膝を強く打ち、痛くて歩きにくく時間がかかったらしい。ひどくなればよいが。

40分ほど待っていたので、BCでもどうしたのかといぶかしく思っていたと後で聞いた。BCと交信して途中まで迎えに来てもらうことにする。20時30分ころ出会い、20時50分BC帰着。

山の大きさをつくづく感じさせられ、疲れた日だった。

みんなで初登頂の祝杯。酔っ払う。

(田中)



うれしくて・・酔っちゃいました～

5日 朝7時 (気温4度0) 、

昨夜“明日はゆっくり起きる”と言って隣のテントに寝た登攀隊の二人（名越隊長、松島副隊長）が起きて、湯を沸かしている音と話し声がした。大きな期待のプレッシャーの解放と、想像を絶する難局の克服で興奮覚めやらず、で眠れてないかも……？

朝食後、テントを撤収し、4人で9時45分、未踏峰、石笋山（スンシャン；5183m）に初登頂目指して出発した。扁平な頁岩の瓦礫で、踏みつけるとよく動き、角が鋭く転倒でもすると非常に危険を感じる、ガレ場の連続である。11時25分、標高4900mの地点に荷物を置き、氷河と其の向かいに有る霸王山の雄姿を背に、初めて経験する未踏峰登頂の胸の高鳴りを感じながら、“極限に挑戦、極限に挑戦”と唱えながら登ったのでした。12時 5000m地点、上になるに従い瓦礫は古い瓦の捨て場のようで、

歩んでも、歩んでもずり落ちる状態で、息苦しさが激しくなる。やっとの思いで13時頃、ガレ場の端末；(5150m)にたどり付いた。これからは垂直に近い岩場だ。しかし形成された岩石は、厚さ3~5cmの泥岩質の頁岩を水平に積み重ねたようで、手で掴むと抜け落ちる状態だった。



途中、石笋山北面に続く岩尾根を見る

ハーネス、ザイルを用意していたが使用しないで済んだ。悪戦苦闘の末13時10分、4人が石笋山（スンシャン；5183m）頂上に立ったのでした。山登りを楽しむ多くの人が目標とする未踏峰登頂を果たした感動と、サポートして下さった方々に感謝の念につまされた一瞬でした。

9月24日に泊めて貰った彭現の村長の白壁の家が米粒のように目だって見えた。



頂上でメモを取り、写真を撮る

写真撮影後、“一降りよう”の隊長の声に、下山時の危険度と登ってきた岩の状況を想像すると、本当に無事下山出来るのか、万一の事が有ると、どれだけ多くの人に迷惑掛けるかと思うと、不安がよぎる。今にも抜け落ちそうな岩肌を恐る恐る掴みながら、互いに声掛け合いながら急斜面を降りたのでした。



石筍山をバックに登頂記念の旗を掲げる

14時15分荷物を置いた4900m地点で行動食を取り、早々と帰途に着いた。帰りは地図とガイドに聞いていた草原を降る予定で其の方向に進路をとった。しかし 草原の尾根まで大きな沢（ゴウ）を越し、高低差数百米の尾根を目指すより、手前のガレ場に変更した。瓦礫の大きさは1m前後の畳を割った様な扁平な岩が縦、横、斜めに混在し、また 角は鋭くとがっており、尻餅でもつくと危険この上なしの状態である。土砂、小石が混ざつてないので、動かないと思って乗った平らな石がぐら付き、飛び退き乗った次の石も、又ぐら付く状態の連続であった。低木の石楠花林なら安全と思って歩を進めると、全体がコケに覆われて、下の石の状態が見えず、落とし穴のように腰まで潜り込む。登攀隊の二人、荷物が30kg以上あり、また シュラフマット等横に荷物がはみ出していたおり、石楠花林を通過する時は、バリバリ大きな音をたてて、枝を折りながら進み、困難を極めていた。急な登りで、腕より太い石楠花の幹を掴んで攀じ登ろうとすると、大きな音をたてて直ぐ折れる。綺麗な花を付ける石楠花が惜たらしく思えた。



BCを目指して魔のガレ場を下る

進路を確保に先に行行った田中さんは姿が見えない。日は傾き、飲み水も減ってきた。簡単に帰着できると、行動食も少ししか食ってなく腹も減った。しかし こんな所で休憩もする気持ちにもなれない。17時を過ぎると太陽がだんだんと水平になり、石の影が長くなり、石の角が二重三重に見えて足の踏み場を探すのに困難を極めた。行けども、行けどもガレ場が耐えない。三回ほど足を踏み外して転倒したが尻餅までにならず、大事に至らなかった。松島さんは、乗った岩がぐらつき、顔から石に突っ込んでいく姿が見え我が顔を覆いたくなつた。奇跡的に血の出てない顔を見て安堵した。

二回目は、薄暗くなって足を踏み外したのか、荷物が下で、足が天に向かったように1回転してでんぐり返った。今度は足の骨折は免れないと予感がした。しかし 山で鍛えた鉄人だ、足を摩りながらザックを担いだ。ビックを引きながら歩き始めた時は、驚きと安堵で胸が一杯になった。

大きな荷物を背負った名越さんが前、松島さんが後ろから声かけて、フォローしてくれる。足の進まない私の為にと思うと、申し訳ない気持ちで一杯だ。

大方日が蔭り始めた頃、名越さんが“迷った時は尾根へ”と言われ進路を上にとった。汗で眼鏡が曇り、日は陰ってくる上に、登り返しには閉口した。先刻までの汗が油汗になってきた。19時30分草場に出た頃、日はとっぷり暮れ、ヘッドライトが頬りだ。草原地帯は、粘土質でストックの先が入らない位固い土質だ。一寸早足で歩くとよく滑り、気が抜けない。好奇心か、繩張り保持の為か、闇の中からダダダダダダ……と大きな音をたてて、ヤクが怒涛の如く突進してくる。大きな声で追い払うがなんどでもやって来る。真っ暗闇の中に、ギラギラ光る目は異様な光景だ。

20時30分ごろ、心配して呉れているのか、木立の向こう、テントの方で動く小さな光が見えた。無線を入れると此方のランプの光も見付けてくれた。今迄忘れていた喉の渇きと空腹、汗に濡れた背中、棒になった足が強く身に沁みた。草場に荷物を投げ出しひっくり返った。帰国準備の為、先に帰還していた吉村隊員を先頭に迎えに来てくれた。

20時47分、BCで杉村総隊長の出迎えを受け無事帰着。テントの中で残り少なくなった賀茂泉で乾杯したのでした。

(那須)

(B C) 10/5 (金) 晴天 気温 8.2°C

8月2日から我々のB Cのすぐ側にテントを設営していた成都からの若者グループ11名（中には23歳の女学生から43歳の公務員まで職種様々）がやっと帰る支度を始めた。仲々元気の良い連中で3日には内5名が石筍山へ挑戦したが失敗であった。残りのメンバーは一日中トランプや歌に興じていた。（何と“北国の春”も上手に歌う）また茶道に精通した者もあり、正式な工夫茶（コレーフーチャ）の作法を教わり味わいながら、日・中の話題で親善交流をした。

登攀隊A C出発し、帰路石筍山にも初登頂を果たしたが、下山の途中道に迷い、B Cからも救援に向かった。

21:00 全員B Cに帰着し、祝杯をあげた。

（杉村）



全員無事B Cに集合！さあ呑むぞー！！

5日、夕刻4人の下山を待って、村長宅まで下る予定にした。

ところが、A Cからの下山は何かのトラブルで遅くなっていた。

総隊長、宮田さん、通訳の鄭さん、徳富さんとテントの外で待つ。

天の川が煌めく夜空になる頃、山の端にヘッドラップの明かりがぽつぽつと見えた。

「負傷者がいるから迎えに来て欲しい」という連絡が入り、B Cに緊張が走る。

ヤクの柵を越え、数名で迎えに上がるが、20分程で接触することが出来た。

その夜は全員で「賀茂泉」のお酒をいただき、楽しくにぎやかな一時を過ごす。

（吉村）

10/6 (土) B C

初登頂と無事下山の祝いの宴が明け、今日は完全休養日。しかし吉村隊員は日本に帰国するため、早朝5時に徳富さんと下山。杉村隊長は念願の魚釣りに谷を下る。成果のほどはここには記さない。

天気もよく、各自思い思いに過ごした模様。宮田隊員はシュラフ・マットなどの天日干しをした後、訓練を兼ねて2時間ほどかけて谷間の調査に。そこでかっての（文化大革命の頃ともいう）惨憺たる材木伐採の跡に出会う。付近の谷川にはその頃に伐られたまま放置された流木が山をつくっており、川沿いにはその頃作られたと思われる石の道や木の橋も残されていた。こんな僻地までよく開発の手が及んだものと妙な感心をした。

（宮田）

5時、暗いうち通訳の徳富さんとベースを後にする。

村長宅で待ってくれていた運転手さんに合流後、成都に向かう。

途中、日隆（僕の知っている村でなくなつたいた）で昼食を取り、21時には成都に帰り着き、老友人の張兄弟と祝杯をあげた。

（吉村）

10/7 (日) B C 曇り 気温 12°C

本日も休養日、那須隊員一人唐さんと馬上でB Cの裏山（西尾根）から石筍山への道を写真撮影に行く。仲々元気でよろしい。小生もその後から同じルートを途中まで追う。展望の良い尾根筋で腰を降ろし、久しぶりにのんびり風景を眺める。南の九連峰に続く大きな山塊、西に遠く連なる5000m級の山々とあくことなく堪能し、改めてこの山域の雄大さを実感した。

帰路尾根道にころがるヤクの白骨死体に会い、自然のきびしさをまざまざと見せられた。いつもは、よく会えるヤクの群が今日はいない。秋にしては高い気温の日中で、木陰にでも休んでいるのか。霸王山の頂上の雪も日々に少なくなっているようだ。

12:00 B C帰着する。

（杉村）



見事にそのままの姿で白骨化したヤク

タウグ谷探査行

10/8 (月)

BC発 (8:20) ~別れ (9:40) 九架棚沟峠 (13:30, 4780m) ~BC着 (17:05)

唐さんの案内でタウグ谷の奥を探査するべく田中、松島、名越で出発。BCのトイレよりタウグ谷と喇嘛沟の合流点に向かって降りてゆく。何のことはない10分と掛からない。BC入りの日僕たちはここを通り過ぎたため4時間半も掛かってしまったのだ。あのときのビバーク地点を対岸に見ながら左岸の踏み後をどんどん遡っていく。谷一面唐松の落ち葉で黄金ロードと化し、まるで上高地あたりを歩いているようだ。僕は最初調査地に予定していた九架棚沟への道を峠まで探ってみることにして、3人と別れる。その別れ地点は海子沟峠よりタウグ谷に下ってBCへ向かう途中ヘッドライトを点火した所だった。



すっかり雪の落ちた南東面・左のスカイラインが南陵ルート

小さな沢のガレ場を1時間20分で広大なアルプに出る（11時、4150m）。踏み跡は左手の丘から尾根を越えているようだが、岩場となっている真上の最低鞍部を目指すことにする。草原から大岩のガレ場、最後はグズグズのガリーを登攀して鞍部に到着。

（13:30, 4780m）。ひそかに期待していた美女はおろかヤクさえ待っていてはくれなかつたが、霸王山の南面と我々の登攀ルートである南岩稜がスカイラインを描いて指呼の間に聳えていた。

（名越）

10/8 今日は四つのコースにわかれ踏査。
杉村さん、那須さん、宮田さんはナマ谷の左岸の尾根。名越さんは、初期計画で私たちが越えようと思っていた峠へ。松島さんはタウグ谷奥の槍、穂高と呼んでいた俊峰の取り付き付近へ。私はその左の谷奥の峠へ。

8時20分、名越さん、松島さん、私と私のガイドをしてくれる唐さんの四人で出発。

15分ほどで谷川へ下り、上流へ向かう。谷からは三峰の眺めが紅葉を交えて美しいが、以前に伐採された樹木が沢山転がっている様は痛々しい。この谷で、登山隊は初日に暗くて道がわからなくて難没したこと。

9時40分。北の峠へ向かう名越さんと別れる。峠では美人が待っていると笑っていた。

ここから藪の中のゆるい登りになる。川も伏流になっている。やがてガレの急な登りになり、踏みあともなくなる。

11時45分。広いカールの端に着く。霸王山と石笋山、BCも見える。こちらからの霸王山は大きな石の塔のようで、まったく異なった山容を見てくれる。

ここから私と唐さんは北東の峠へ向かう。緑は無く、荒涼として、急な斜面は大きな石もグラグラし、その上に小石が乗り、どの石も鋭く尖っていてとても歩きにくい。いつも先を歩いている唐さんがにやにやしながら峠のほうを指差し、あそこだから先に行けと言う、峠への道を目で追うが道らしいものではなく、大きな岩の連なりでどこが峠かはっきりしない。最後は槍の下部の岩棚を通らなければいけないようで落石が危ない。



九架棚沟への峠に迫る

先ほどから絶え間なく落石の音が聞こえているので、これ以上山に近づくと危険と判断して、峠へ行くことを断念し、少し右上の安全と思われるカールまで登り松島さんと合流する。12時50分。標高4550m。

近くから山を眺めると、急な岩壁はボロボロの岩ばかりで危険で、とてものぼれそうにない。あわよくば登りたいと言っていた松島さんも、これでは駄目だと諦めた様子。ここからは谷の下部、西の山々の眺めが素晴らしい、日帰りコースとして面白そう。

後で唐さんに聞くと、ほんの時たま薬草採りが峠付近に行くと言っていた。

16時25分。BC帰着。

（田中）

10／9 (火)

BC発(8:10)～彭家正沟(10:35) 3975m～
春牛棚子(11:00)～猿口(峠13:20) 4600m～
黄土栄口(峠15:00) 4723m～石筍池(16:00)

今日は霸王山北側の谷までトレッキングの日。8時15分頃に全員BCを出発。天気もよく遠足気分で出かけたが、やがてそういう気分は吹き飛ぶことになる。途中、深い谷に下り、廃屋や使われなくなったヤク用の施設などを見る。目標の峠の手前で唐さんから峠の向こうには目指している池はないとの話があり、名越隊員ほかが偵察に行く。結局、峠は2つあることが分かり、瓦礫の道を辿って猿の口という最初の峠と理県側への峠(黄土栄口:ホアリヤク)を越える。2つの峠の間は瓦礫だけの広い谷であったが、2つ目の谷間の景色を見て全員息を呑んだ。右手近くに聳える霸王山の勇姿と両側に連なる山々の間の深い谷に何と壮大な雲海が広がっていたのである。



峠に着くと黄土栄沢は雲海に覆われていた

当然名越隊員がはまぐり氷河から見つけたという池が見当たらない。唐さんもずっと下まで降りないとうなことを言う。幸い、しばらく探索していたら一瞬ガスが晴れ、それしき池が見つかる。石筍池(スースンイケ; 4490m)と呼んだ瓢箪形をした池で、水深は浅いものの、水はきれいで水量も豊富でキャンプ地としては言うことはなさそうであった。テントも張り、各自思い思いに周辺調査などをする。食事は3日間松島隊員の調達によるおいしいインスタント料理を堪能する。



池を離れる朝、美しいレンズ雲が掛かった

ところがこの夜から奇妙な悪天候に見舞われることになる。気象屋として解せない天気にテントの外で天を仰ぐ時間が増えた。

なお、こんな山奥の地にもやってきた人がおり(先日BCを訪問した若者と思われる)、彼らが残したごみがあった。中国の若い連中もなかなかのものだと思った。

(宮田)

10／10 (水)

7時半起床 一晩中降っていた雨は止んだが、強い風は吹いている。体感温度は寒く感じる。ガスが掛かって霸王山、石筍山の写真は撮れない。下界も雲海だ。風が強いが雲がどんどん湧いてくる。近くの山へ登る人、花の写真を撮りに行く人、天を睨んで雲と睨めっこしている人、霸王山、石筍山の写真が諦められずテントで寝ては起き、出たり入ったりしている人、勝手気恁な一日でした。

(那須)



石筍池(4565m)の縁に張ったテントと雲海

10/11 (木) 曇り 気温 10°C

8:25 2泊3日滞在した石筍池側のテント撤収し出発する。残念となつたがこの間天候不良の為霸王山の北側からの全容を眺めることはできなかつた。しかし急峻な岩壁の様子等は十分見たし、この山への登頂のきびしさが理解できた。

往路で苦労したガレ場の急登と4700mの2つの峠越えも復路は比較的楽に通過した。このルートは踏み跡もしっかりしており、峠には石を積み重ねた大きなオボ（ラマ教関連のケルン）やヤク放牧の石垣もみられ、結構人の往来もあるものと思われた。



黄土巣口（峠）のオボ

また途中にはすばらしいシャクナゲの長いトンネルがあり、是非花の季節に今一度訪れてみたいものである。この度も休憩時何度かヤクの群に会つたが、我々から塩がもらえると思ってか、すぐ近くまで寄ってきて恐れない。とくに若いヤクは興味深そうな様子で我々を観察していた。

14:00 BC帰着。

(杉村)

10/12 (金) BC

BC最後の日。朝はすぐ近くの山まで霧に隠れていたが10時過ぎには晴れる。

ゆっくり休養。荷物の整理や周りのゴミ拾い。世話になつた唐さん夫婦とも今日でお別れ。

余った行動食とポリの水筒を持って行く。水筒は喜ばれる。

名残り惜しくて、景色や花の写真を撮りにまわりをブラブラする。

コックの万さんは、毎日おいしい食事を作ってくれた。ありがとう。

(田中)

10/13 (土) BC～日隆

いよいよBCを撤収して下山する日。8時頃に朝食。その後、テントの撤収、気象測器の撤収、唐さんと黄さん夫婦にお礼と贈り物などして、なつかしいBCを後にして下山。昼頃に村長宅に到着。鄭さんの奥さんの向さんほかの迎えを受ける。向さんには学術隊はこの後ずっと通訳とガイドをしてもらうことになる。

昼食は村長さんの奥さん手作りのご馳走による、祝賀会を兼ねものとなつた。名越隊員から地元の人たちが神と崇める山への登頂に際して心配りをした旨のあいさつに対して、村長ほかの人たちから感謝の意が述べられた。地元の方たちとの気持が通い合う、楽しいひとときであった。



村長家による心づくしの料理とパイチュウ



村長宅庭にて石筍山をバックに、隊員と全スタッフ

14時45分頃、マイクロバスに乗って村長宅を出発。懐かしくもある厳しい道路と運転の旅がふたたび始まった。17時30分頃に日隆の鑫昆ホテルに到着。夕食はホテル近くの食堂で。無事下山した喜びと安堵から楽しい宴となつた。

(宮田)

九寨溝／康定 そして成都へ



棚田のような黄龍の渓流



塔公草原のパンチエンラマ廟と海子山群

10／19 登攀隊2名、成都着（16：00）
学術隊4名、成都着（19：30）

登攀隊（名越、松島）は四姑娘山域の偵察を大雪のため早めに切り上げて、日隆より丹巴～ゲータレン峠～塔公～康定（温泉）経由で帰還。少しだけど垣間見たチベット草原と康定の温泉郷（龍頭沟温泉）はすてきだった。学術隊（全員）は日隆からもう一度ウーピエン川を遡って、彭現村入口を素通りし、理県経由で世界遺産の黄龍、九寨溝の絶景を堪能？して交通渋滞によりかなり遅れて成都帰還。（名越）



世界自然遺産、九寨溝の神秘的なエメラルドの池



沟より流れ落ちる清流より人の多さに閉口する



お礼の晚餐会は韓式料亭にて

学術報告

学術調査隊について

田中勝彦

支部10周年記念事業の一つとして、霸王山登山隊の派遣が具体化した中で、折角未知の領域に行くのだから、登山だけでなくトレッキングや踏査なども加えたらどうかということになり、いろいろ検討された結果、この地域の様々なことを調査してみようということで学術調査となつた。

以前から横断山脈に興味を抱いていた私は参加を申し出、この方の責任者になることになった。

専門的な知識を持たない私にとって、学術という言葉は大変な重荷であったが、行けることが何より嬉しく、また、なるべく多くの会員が参加できるようにするために早く体制を決めたほうが良いのではと思って引き受けることにした。

最終的には、那須正義さん、宮田賢二さん、私の三名が調査隊となり、総隊長の杉村功さんにも手伝ってもらうことになった。

調査内容について検討し、次のような調査計画をたてた。

- ・周辺地域の人々の生活の実態調査
- ・周辺地域の自然環境および自然環境とのふれあいの実態調査
- ・周辺地域の気象変化の調査
- ・隊員の健康調査：高所における体調など
- ・その他：地名、山名、言い伝えなど

調査方法は実地調査、聞き取り調査とする。

担当は別に決めなかつたが、那須さんと私が踏査など、気象学者の宮田さんには気象、医者でもある杉村さんには、健康、さらに地域の医療問題など自ずと決まった。

調査隊の活動日程については、登山隊の活動を主としながら、一部別行動の計画を立て、10月1日から8日まで、4950m峰の南の峠を越え、霸王山南東の理県側の3883mの村を拠点として、フィールド活動することにした。

この地域、殆ど情報が無く、昨年の名越さんの偵察と旧ソ連の地図のみが頼り。

出発直前になって、3883m地点の村は現在は無いという情報がはいってきた。いまさらどうしようもない現地に着いてから考えようということで出発。

実際に現地に行くともう何年も前に皆山から下り村は無く、峠を越えると5日くらい歩かないと村は無いとのこと。さ

らに越える予定にしていたタウグ谷の峠道、谷の最も奥の峠道は地図上でははっきりしているが、現在は馬も通れない荒れた道のこと。

途中で拠点を移すべく予定をしていた村が無いということで、調査隊はBCにずっと滞在して活動することになった。

そのため、聞き取り調査を主とした、地域の人々の生活状況の調査が限られたものになり、出発前日宿泊した三段地（サンドワンディ）での、村長、その兄（党の書記長）などの数人、BC地点に住む唐さん（66歳）、黄さん

（60歳）の夫婦だけとなってしまった。その反面、ここに30年住み、地域を知り尽くしている唐さんのガイドで多くの場所を踏査することができたのは大きなプラスであった。



唐さん、黄さん夫妻と名越隊員

この地域周辺は農業離れ、とりわけ牧畜離れが進んでいるようで、BCを置いた冬牛棚子も以前は3家族いたが、今は唐さん夫婦だけ、そしてこの夫婦も今年限りで下におりとのこと。かつてはヤクの乳しぶりなどしていた柵や石室が、タウグ谷奥、西の谷、下流などに五ヶ所ほど廃屋の状態になっていた。BCの四棟の石室もこのまま廃屋になるのだろうか。

この夏訪れたもう少し奥の甘孜あたりでは過放牧とも思えるほどのヤクの数で、各地で柵をめぐらして牧草地の回復を図っていたのと対照的であった。

唐さんは山を下りるが貴方たちが、またここに来たときには一緒に歩きたいと嬉しいことを言ってくれた。

この地域を歩きまわって、ここにはヤクなどの放牧を除いては手つかずの美しい自然が広がっており、将来観光地として大きく発展するのではないかと思った。BCを拠点として、タウグ谷奥、4950m峰南の峠、AC付近（ここには氷河もある）、石笋山（スーサンシャン）に続く南の岩の尾根、南西の広い草地の尾根などいくつも日帰りのコースがどれ、2泊ほどすれば霸王山の北側で、南側とは

異なった荒涼とした風景が眺められる。1週間くらい滞在すれば、とても楽しい山旅ができるだろう。

村長たちも地域の活性化のために、観光に期待している様子で、私たちにもこここの良さをしっかり宣伝してもらつて、多くの日本人に来てもらいたいと話していた。四川登山協会も宣伝しているらしく、途中11名のグループが4日間滞在した。

ただ、この地域、無人となると思われる所以、ゴミ、トイレなどの汚染には充分な注意が必要で環境保護が大きな課題となろう。

私たちが北側に回って2泊した小さな池の周りには、食べ残りやビニールが散らばっていた。

また、この地域はBCの南東から北にかけて、九連峰と言われる5000m前後の山が連なっており、殆どが無名で未踏峰と思われ、魅力的であるが、近寄るとボロボロの岩肌で、落石も多く、とても危険で、登山の対象にはなりにくいと思われる。



タウグ谷奥の山々（正面槍、右穂高）

【植物】

植物については全くの素人なので種類の識別などは難しく無理ですが、少しだけ。

この季節、多くの花は終わり、黄葉の美しい時期に移るのですが、まだ少しは花も残っていた。

秋の花の主役はリンドウで、ヒメセンブリなどはいたるところに咲いていた。とりわけ石筍山の南の尾根4500m付近の急斜面には、濃青色、薄青色、紅紫色の花冠2~4cmの花が宝石を散りばめたように咲き誇っていた。13種類のリンドウ科の植物を目にすることができますが、残念なことに名称を識別できないものも多い。



ヒメセンブリ（リンドウ科）

キク科のウスユキソウの仲間、レオントポディウム・ストライケイ、ヒマラヤヌムもやや遅いが、BC付近の草地や谷川沿いに大きな群落をつくり、私たちの目を楽しませてくれた。ヤマハハコ、ヨモギキクの仲間もいくつか目にした。サウスレア・レオントトイデスは数多く咲いていた。



レオントポディウム・ストライケイ（キク科）

標高4700mほどのABC付近の石礫地では殆ど花は終わりだが、キク科のサウスレア・クエルキフォリア、ヒウシペタと思われる二種類のセーター植物、サウスレア・クロボサ、ナデシコ科のシレネ・ゴノスペルマ、ユキノシタ科のサキシフラガ・アリストウラタなどが咲き残っていた。

北側へのトレッキングの途中4200m付近では、ケシ科のメコノプシス・ブニケアと草丈20cmほどの青いケシに出会った。あとで成都で聞くと10月中旬のこの時期にケシが見られるのは非常に珍しいと言っていた。



メコノプシス属の一種（青いケシ）



赤いケシ

植物で一番驚いたのは、BC北の4200mの地点で目にした、草丈3m近く、茎径8cmほどのダイオウ属と思われるタデであった。岩だらけの斜面、低い草ばかりのなかで、飛びぬけて背が高かった。実は茶色っぽくなり、茎も黒くなりかけ葉も枯れかけていたが、40cmくらいの円形で、2ヶ所の浅裂があり、開花までに年数がかかるらしく近くには茎の出でない葉が青々とした株がいくつか見られた。実をつけた株は4本あった。



ダイオウ属の実

また、この季節は草の実、木の実が美しく、バラ科のソルпус・フォリオサ（ナナカマド属）の白い実、ヒメシャリントウ、ロサ・シカンゲンシス、メギ科のペルベリス・ヤエシュケアナの赤い実などが彩りを添えていた。



ペルベリス・ヤエシュケアナ（メギ科）

このあたりの森林限界は、およそ4200mでBC側は低灌木と草地が多いが、対岸や谷の奥の方はマツ科の森林が広がり、上部ではカラマツが黄葉して美しかった。

このあたりも1980年代に中国奥地で盛んに行われた森林伐採で、多くの樹木が伐採されたらしく、BC下の谷川沿いには運び出されなかった数多くの材木が放置され、無残な姿をさらけ出していた。中には直径2mもの木もあった。唐さんも以前はこの下の方にもっと豊かな森があったと話していた。

奥地で盛んな薬草採りについては、このあたりは薬草の種類が少ないのであまり行かないとのこと。

唐さん夫婦の話によると、このあたりが最も美しいのは、尾根や丘が様々な花で覆われる6月。

四川省にはまだ知られていない花があると言われるだけに、誰も調査していないこの周辺、新らしい種の発見があるかもしれない。

花の季節にもう一度訪れてみたい。

シャオチンケン

小金県 彭現 標高3,160m 村長の家

1. 人口は、小金県7万人、三段地（サンドワンディ：3160m）地区村民240人。
2. 主食は、米・麦・とうもろこし、えんどう、大豆・ジャガイモ等。
3. チベット民族と結婚すると、子供は2人まで産んでもよい。後日、若い女性に聞くと、教育費が掛かるので、欲しいが二人は生めないとのこと。
4. 農家は、田畠を耕作すると、政府より補助金ができる。（3年前より）
5. 農家は、税金を払わなくてよい。政府が農家を優遇する処置を取っているが、農業離れがどんどん進んでいる。
6. 村長のお爺さんは漢民族、お婆さんはチベット民族である。
7. 農地は空いている処が有れば、国の資源局に申請すれば、誰でも許可される。
8. 放牧する場合は、空いている処が有れば、国の資源局に申請すれば許可される。
9. 電話、新聞、手紙は一切無し。村長の兄は共産党書記である為、手紙は配達されるであろう。
10. 宗教は、ぼん教である。
11. 地元でテントを張る場合、政府の体育局と寺院の許可が必要である。改革開放以前は、寺院の許可が困難であった。
12. 葬儀は、大人は土葬（自分の管理している土地に埋める）、未成年は水葬（川に流す）

霸王山 パーカン；5,551mについて

1. 地元民は、“山王頂”又はトゥオニュオンディオン（菩薩の名前）と呼んでいる。
2. 信仰対象の山である。ひと月2回（満月と新月の日）程、霸王山に向かって香木の青葉を燃やし、お祈りをしている。



夫婦仲良く・畑を耕す

3、霸王山の伝説

昔、このBCの下を流れている喇嘛沟(ナゴウ)にナマと言う修業僧が住んでいた。地元民が、7日毎に僧の所へ食べ物を届けていた。

ある時、また来ますといつて帰ろうとしたら、重要な修行に入るからもう来ないでと言われた。しかし住民は7日後、食べ物を持って行つたが、僧は居なかつた。

そして 霸王山の方から、念佛をあげる僧の声が何時までも聞こえていた。

- 4、経幡・タルチョ；民家の屋上や庭、遊牧民のテント、あるいは峠や聖山、聖湖にはためく白又は5色の旗。旗には経文が印刷されており、旗がはためくたびに、風が仏法を世界中に広めてくれる。五つの色は、物質の五元素（五大=地、水、火、風、空）を意味し、黄=大地、赤=火、青=天空、緑=風又は水、白=水又は雲、を表す。旧暦の7月10日に多くの人が参加して祈る。



色とりどりのタルチョとチョルテン

- 5、10月13日、BCを撤収し引き上げる時、村長の家に立ち寄った。奥方手造りの料理をご馳走になった。其の席上、名越登攀隊長が、“霸王山は信仰の山ですから頂上より5m手前までで、頂上は踏んでいません”と話された時、村長が“こんな良い話を聞いて嬉しい”と涙ぐんでいたことが、心に強く残っている。

トソニヨーピンツー
冬牛棚子；3780m (BC隣住民：唐昉清、黄仲美)

- 1、唐さん66歳；漢民族出身、黄さん60歳チベット族出身。村長の妻の両親である。
- 2、二人は両親が知人で、見合い結婚である。国が政策的にアルバイト等を進めるので、最近は、地区以外の人と自由恋愛で結婚する人が増えている。
- 3、唐さん夫婦は学校へ行ってないが、孫は行つてゐる。
- 4、衣装は夏、冬含めて15着位持つてゐる。
- 5、夫が妻を呼ぶとき、名字を呼ぶ。
妻が夫を呼ぶとき、名字の後に“四番目のお兄さん”と付けて呼ぶ。（唐さん四男）

- 6、唐さん寝る時、上半身裸、下半身ズボン下。

7、唐さんは、ヤクを30頭（実際数えると42頭いた。）豚3頭、馬3頭、鶏1羽、飼っていると言つていて。動物は自然交配で殖えている。

8、ヤクは、1年間で3頭つぶす。2頭は売つて、1頭は乾燥、及び燻製にして、1年掛けて食べる。ヤクは雄=2,000元以上、雌=1,700元以上で売れる。ちなみに、四川省の平均年収は2,700元（4万円）位と言われている。

9、建物の中央にある部屋が動物の肉を乾燥保存する部屋らしい。豚一頭分位の骨の付いた肉がぶら下がつていて。その下には径1.2m位の桶に豚の餌が置かれていた。不思議に匂いが無かつた。腐敗菌が少ない為か？

10、唐さんの1日の食事

朝=団子、漬物、レタス、前日の残り物

昼=お粥、麺類、ジャガイモ、野菜炒め

夜=ご飯、肉を入れた野菜炒め、漬物

11、衣類は小金までタクシーに乗つて買出しに行く。

12、食べ物は、ジャガイモ、豆類を持って行き、主に米等と物々交換をする。

13、不幸、祝い事の連絡は徒步が多い。

14、日にちは、日捲りを持っている。

15、病気の時は、薬草で治すが、大病はしたことがない。

16、夜の明かり、油のランプ。

17、以前は電気がきていたが、15年前にこの上流に有つた水力発電所が故障したが、国は修理してくれない。また、道路も無くなつてゐる。30年前から、改革、解放政策により、小金の市町などへの出稼ぎ、アルバイトを推進。古いソ連の地図には、村落が記録されているが、今は無くなつてゐるのも頷けます。

18、ここは3780mと富士山の標高と同じであり緯度は鹿児島に匹敵する北緯32度である。10月でも菜の花が咲いていた。積雪は厳寒の年で60cm位、普通は15cm位らしい。樹林帯は4000m近くまでヒマラヤ杉等が茂つており、それより4500m位までは草やお花畑が続き、コケの順となつてゐる。

また 当地に9月25日から10月13日まで、述べ19日間居たが最低気温3～4度Cであった。

地形、地質について

1、地質について

ヒマラヤ、エベレストは、海の動植物

屍骸が堆積した海底が隆起して形成され

た石灰岩質と言われている。

当地方は泥、塵が堆積した湖沼（？）が隆起したのか、中性層、第三紀層の堆積岩の一つ、頁岩で形成されていると思われる。珪長質で白色の石英が、広いもので数mの帯状になって垂直に貫入したものが確認され、花崗閃錫岩、チャートと思しき（亀裂が比較的少ない）岩が大きな塊になって点在している。これが現在保っている高い山々の崩壊を遅らせているのかもしれない。

石筍山頂上西のニンジンを逆に立てた様なピークは、頂上からは見えなく、岩の形成が確認出来なかつた。

2. 氷河について

ACに選んだ標高4750mに、長さ1000m、幅200m位の氷河がある。



ACテントと、はまぐり氷河

写真中央の低い箇所が高さ約7m、幅約30mの壁になっており、その向こうは、数百mの絶壁だ。よって、其の地点が氷河の始点である。



はまぐり氷河のエンドモレン

下流も、亀裂の少ない斑岩質の岩石が大きな壁となっている。氷河全体が雷鉢状の中にあると思われる。冬場 積雪と落石が高く堆積し、夏場 温度の上昇と共にバランスが崩れ、その壁の上を溢れ、崩れ落ちていると思う。

この周辺では唯一の氷河かも？

地球温暖化により、近い将来消滅するか？と想像すると、やはり寂しい。

3. カールの形成

霸王山の直下に長さ40m、幅10m位の水溜りがあった。

山側は凍土の様に氷に覆われているのが見える。水面には、水鳥が飛び立つように水しぶきを上げて落石が続いていた。

永い年月、莫大な量の崩落が有ったと思われるが、不思議に堆積した後が無い。大きく曲がっている山側の面と移動する氷河の氷の間に隙間が出来、其処へ吸い込まれていると推察できる。



この写真は、カール形成の貴重な証でしょう

4. カール

高い山々の麓は大きく婉曲に削り取られており、カールと思われる。

遠い昔、付近一帯が深い氷河に覆われていたと想像すると。ロマンを感じる。

その他

1. 10月15日（月）、バスで日隆から小金経由（国道）～茂県に向かっていた時、小学生の登校に出会った。殆どが10人前後の集団登校です。其の中の上級生（5～6年生）と思われる2～3人が額に手の甲を当て敬礼の姿勢をしていました。この部族の学費は、寄付と援助により、個人負担は20%以下又は、払えない人は0%なのです。部族の中にはバスを持っている人はいません。

バスが来れば金持ちか、又は寄付してくれた人が乗っているので、感謝の気持ちを表すように、教育されているらしい。

（気が引けて、カメラを向けられなかった）

医学的調査

学術調査隊 医師 杉村 功

- 1) 隊員の健康管理
- 2) 地域住民の健康調査
- 3) 飲料水の細菌学的調査

1) 隊員の健康管理

(i) 出国前の健康調査

出発前行われた数回の会合時、口頭により各隊員の持病（罹患疾病）および健康状態について尋ねたが、G隊員の高血圧症の外はみられなかった。しかしこの度の登山隊隊員7名の平均年齢は63歳（登攀隊3名54歳、学術調査隊4名60歳）とやや高齢もあり、注意が必要と思われた。

(ii) 移動および登山活動中の調査

出発前より全隊員に、全行程を通じて、何らかの身体的異常を感じた時には直ちに申し出るようお願いし、疾病の予防と早期対応に心掛けることとした。

また健康チェックとして、毎朝食前に体調の良否を聞き、BC（3780m）では同時にパルスオキシメーターによる血中酸素飽和度測定を行い、高所障害の早期発見と予防に努めた。

(iii) 高所障害への対応

この度の最高到達地点は標高5551mで、隊員すべてが過去に何らかの高所体験と障害についての理解があることが解かり、各自の判断を重視した。さらに上述の検査や他感的所見をもとに、その都度迅速に対応することとした。

(iv) 医薬品および医療機器

今回の登山地域が医療施設の完備した都市から遠距離にあり、非常事態をも想定して小外科手術もできるリストを作成、準備した。（表1、2）

(v) 登攀隊への救急医薬品

BCから遠く離れ登攀活動中の事故や疾病の際、その対応への必要最小限の医療セットを準備、携帯させた。

(vi) 結果

如何なる登山活動に於いても、予想外の出来事に遭遇することがあり、今回も十分な準備を行った。しかし幸い全行程を通して、大きな事故や疾病もなく、医師としての出番は意外と少なかった。実際には軽度の高所障害や転倒による打撲等で、いずれも治療により大事に到るものではなかった。その詳細は時系列で示したので、今後の山行に役立てていただきたい。（表3）

尚隊員以外で医療対象となったのは次の通りである。通訳Sの右足指の靴ずれによる潰瘍形成への処置を行った。

通訳Pの感冒（発熱、咽頭痛）に投薬した。

現地案内人Tは左足背に馬蹄による挫滅創（疼痛、腫脹）あり、抗生素、鎮痛剤の投与と連日の創交換によりBC撤去時略々治癒の状態となった。



住民治療

高所障害について

高所障害の発生には、その条件として高度、高所の滞在期間の他、登山者の身体能力（年齢、心肺機能、高所での耐性）も大きく関与している。症状の把握にはパルスオキシメーターによる血中酸素飽和度 (SpO_2) が用いられる。今回本隊も SpO_2 の測定を行い、治療の参考とした。（表4）



隊員等の健康状態を聞き取る

この度の登山活動中、高度障害を來したもののは7隊員中5名で、いずれも軽症であった。その内4名には薬剤（ダイアモックス）が投与された。実はこの薬剤

は対症的作用を期待するもので、現在尚その使用・用量・効果には異論があり、希望者のみに投与した。元々高所障害は SpO_2 の低下が主因であり、まずは深呼吸による大気中酸素の取り込みが必要である。自験例でもキャンプ（4500m）で睡眠中、突然の呼吸困難時、数回の深呼吸により軽快したことがある。しかし中程度以上の高所障害では、最悪死亡の危険性もあり、迅速な酸素吸入、低地への移送等の処置が必要である。

今後も高所登山に挑戦される方々には、是非とも高所障害についての知識を深め、対応して下さる様願っている。

2) 地域住民の健康調査

当初登山隊活動中の通過地やBCなどで、地域住民の健康や疾病についての調査を予定していた。しかし予想外に辺境の地であり、住民との接触も極めて少なかった。その為地域の医療環境や疾病状況の実態についての調査や聞き取りも限られたものとなつた。実は有益な知見も2、3得られたが、正確な調査とは言えず、残念ながら報告は控えさせていただくこととした。



調査のため唐さんの住居を訪ねる

3) 飲料水の細菌学的調査

人の日常生活で最も大切なものは水であり、とくに登山活動での安全な飲料水の確保は必須の条件である。

さてこの度の登山に限って述べれば、幸い豊富な水に恵まれ、困る様なことはなかった。しかし原則として生水の摂取は禁止し、必ず煮沸水を利用した。その為飲料水によると思われる消化器疾患（細菌性下痢等）はみられなかった。しかし使用した水の安全性を確認する為に、

当該水と比較としてBCの近くの河からも採取し、サンプルとした。これらは帰国後細菌検査に提出し判定された。（表5）

結果採取した水の中で飲料水として最も多用したのはBCの湧水であった。この水からは *Acinetobacter baumannii* が証明されたが、この菌は通常土壤など自然環境に広く分布し、人体にも常在して時に感染症を起こすとされている。

次に石箒池の水を多く利用したが、細菌は認められなかつた。又ACの側にある氷河湖の水からは細菌はみられず、氷河の表面の触解水に *Pseudomonas* 属が証明されて興味深い。恐らく大気より飛来と思われるこの菌も土壤・水中に常在し、時に創傷感染の起炎菌となる。



谷川はそれほど清くないのに魚は住んでなかつた？

一方飲料用には使わなかつたが、河川より採取した水からは、多数の細菌が検出され、中には強い毒素をもつ菌種も含まれていた。とくに支流については、両岸はヤクの広い放牧場が多数あり、人や他の生物（ネズミ、イタチ、ウサギなど）の生息の場で、汚染がとくに著しくなっているのではないかと推察する。いずれにしても、この地域での登山活動中に水を飲料用として利用する場合は、必ず煮沸することを心掛けるべきであろう。

終わりに

医学的調査に当たり、下記の方々にお世話をになりました。厚くお礼申し上げます。

八幡クリニック 八幡紀子院長

呉中通病院 中川俊文院長

広島市立広島市民病院 臨床検査室

表1 医療用薬品

1. 内服薬

	薬品名	個数
呼吸器疾患		
感冒	PL散	50包
	ダンリッヂ	50錠
咽頭痛	SPトローチ	50ヶ
胃腸疾患		
下痢止	ロペミン	50錠
整腸	ビオフェルミン	50錠
胃炎	SM散	50包
	プリンペラン	50錠
胃潰瘍	タケプロン	50錠
胃痛	ブスコパン	30錠
疼痛疾患(鎮痛・消炎剤)		
	バッファリン	50包
	ロキソニン(15)	50錠
	ボルタレン	50錠
	ボルタレン(座薬 50)	30ヶ
化膿疾患(抗生物質)		
	セフゾン	50錠
	クラビット	50錠
その他		
ビタミン剤	ビタメジン	50錠
	ハイシー	50錠
止血剤	アドナ	30錠
めまい	メイロン	30錠
車酔い	トラベルミン	30錠
高所病	ダイアモックス	50錠

2. 外用薬

	薬品名	個数
鎮痛	インドメタシン軟膏(25)	5ヶ
	モーラステープL(7)	40袋

化膿止	ゲンタシン軟膏(10)	10ヶ
かゆみ止	レスタミンコーワ軟膏(10)	10ヶ
うがい薬	イソジンガーグル(30)	5ヶ

(呉中通病院より寄贈された)

表2 医療用機器

1. 医療用品

		個数
注射器	5, 10cc	各3
注射針	18, 23G	各3
エラスター針(針付)		2
エラスター針(針なし)		2
局所麻酔薬	1%キシロカイン 10cc	2
消毒用イソジン液	250cc	1
アルコール綿		1
生理食塩水	100cc	2
ブドー糖液	200cc	2
ステリテープ	大中小	各2
シルキー絆創膏		10
バンドエイド		1
三角布		2
弾力包帯	大中小	各2
ギプス(プラスチック)	4号	2
アルフェンスシーネ	2, 3号	各2
テーピングテープ	大中小	各2

(呉中通病院より寄贈された)

2. 手術用機器

		個数
メスホルダー	中小	各1
替刃	丸尖	各4
ハサミ(クーパー)	中小	各1

ピンセット	釣有・無	各1
コツヘル	中小	各3
持針器	中小	各1
糸付針(ナイロン)	1, 3号	各5
糸付針(シルク)	3, 5号	各5
ガーゼ	中小	各5
紙シーツ	中小	各3
ゴム手袋	7号	3
帽子		3
マスク		5
帽子		3

(呉中通病院より貸与された。手術用品はすべて滅菌の上持参した)

3. 検査用具

		個数
聴診器・血圧計・体温計・打鍵器		各1
耳鏡等		一式
パルスオキシメーター	(八幡内科医院より貸与)	1

表3 隊員の病状と治療

月 日	隊員名	症状と治療(投薬、処置等)
9 24	A. G	下痢(小金ホテルの辛い漬物による)止下剤で改善する
9 26	E. G	高所障害(BC到着後より呼吸困難あり)ダイアモックス内服で改善する
9 27	B	高所障害(4600mの峠越え疲労、顔面浮腫)安静にて改善する
10 1	F	感冒(咳、咽頭痛あり)PL散、SPトローチ投与
10 4	C	高所障害(霸王山下山後より顔面浮腫、右眼視力異常あり)安静、ダイアモックス内服で改善した
10 5	B	左膝打撲(BC帰還時ガレ場で転倒)安静、鎮痛剤、シップ処置にて軽快する
10 10	F. G	高所障害(4700mの峠越え後に呼吸困難)ダイアモックス内服で症状回復した
10 12	F	右示指瘭疽 切開、排膿
10 16	F	歯痛あり 鎮痛剤投与

表4 血中酸素飽和度(SpO₂)測定値※1

()脈拍数

月 日	場 所	隊 員※2						
		A	B	C	D	E	F	G
9 23	小金	96(67)	96(55)	97(68)	96(78)	94(70)	96(65)	94(65)
9 24	彭現(3200m)	96(60)	89(66)	92(74)	92(80)	91(81)	86(70)	94(72)
9 25	BC(3778m)	88(67)	81(66)	87(83)	85(90)	83(79)	85(67)	86(72)
9 26	"				85(84)	82(73)	82(73)	81(74)
	"	※3 85(108)	73(84)	84(105)				
9 27	"	87(67)	80(74)	90(63)	81(79)	65(97)	85(72)	85(68)
9 28	"	87(65)	82(67)	87(61)	89(74)	64(108)	80(64)	92(68)
9 29	"	87(64)	89(63)	86(61)	88(77)	75(90)	86(64)	87(71)
9 30	"				89(64)	79(80)	89(62)	90(63)
10 1	"	90(60)	90(64)	87(67)	92(64)	90(81)	87(62)	90(62)
10 2	"	92(62)	94(57)	89(54)	93(63)	91(79)	89(63)	90(63)
10 3	"				85(78)	88(78)	86(67)	91(64)
10 4	"					88(93)		85(75)
10 5	"			※4 91(69)		82(102)		85(76)
10 6	"	92(60)	88(59)		87(71)	90(72)	89(55)	86(71)
10 7	"	90(48)	94(51)		86(71)	89(70)	85(65)	88(72)
10 8	"	91(54)	92(50)		86(74)	86(75)	88(59)	81(62)
10 9	BC	88(61)	90(61)		85(65)	92(81)	87(66)	80(72)
10 10	石筍池(4490m)	87(72)	84(61)		87(68)	83(83)	85(59)	82(73)
10 11	"	88(61)	85(70)		86(60)	80(87)	82(66)	75(82)
10 12	BC	90(59)	87(65)		90(57)	90(73)	88(60)	93(54)
10 13	"	90(57)	93(61)		95(57)	87(83)	91(62)	87(69)

※1 測定器はOxypal Mini SAT-2100 オータックス KK 製

(八幡内科医院より貸与された)

計測は原則朝食前、右示指指光で実施

※2 隊員:登攀隊 A, B, C

学術調査隊 D, E, F, G

※3 登攀隊偵察から 14:00 BC 帰着時測定

※4 C隊員 ACより 15:30 BC 帰着時測定。翌日帰国した。

表5 飲料水の細菌学的検査結果

採取場所	高度(m)	細菌種	
AC氷河(融解水)	4700	<i>Pseudomonas fluorescens/putida</i> <i>erii</i>	<i>Pseudomonas stutzeri</i>
AC氷河湖	4700	陰性	
石箒池	4490	陰性	
BC湧水	3780	<i>Acinetobacter baumanii</i>	
彭家正沟(本流)	3490	<i>Pseudomonas fluorescens/putida</i>	<i>Escherichia coli</i>
彭家正沟(支流)	3435	<i>Klebsiella pneumoniae</i> コアグラーゼ陰性ブドウ球菌 <i>Staphylococcus</i> 属以外の <i>Micrococcus</i> 科 グラム陰性桿菌(同定不可)	<i>Escherichia coli</i>

(検査は広島市立広島市民病院 臨床検査室で行われた)

気象調査報告

宮田賢二



一人天を仰ぐ（石箒池にて）



コルを越える雲海（BCよりタウグ谷を見る）

1. はじめに

学術調査のテーマを考えた段階では、登山期間中の気象変化をフォローすることと、BCでの気温と湿度の簡単な観測を行うことしか考えてはいなかった。登山活動への何らかの寄与のほか、ともかく基礎的なデータを得ておこうという考えは持っていたが、それらのデータを用いて何かこの地域の気象について調べるようなことはあまり考えてはいなかった。

ところが現地でいくつかの予想しない気象状態や現象に出会うことになり、改めて横断山脈地域の気象についての勉強不足を悔やむことになった。ただ帰国後にこの地域の気象の実態や機構について調べてみたところ、そのような情報はあまりないことも事実のようであった。

ここでは行く前に気象の予報方法について検討したこと、現地で経験したこと、帰国後に調べたり考えたこと、今後の課題などについて報告する。

2. 天気予報と気象観測の方法

今回の気象にかかる調査課題は計画書に示したように、“霸王山周辺地域の気象変化の実態調査”であった。具体的には期間中の天気や気象の変化の観測と、BCでの気温と湿度の連続観測である。ただ観測のポイントや方法について十分な検討をしないままに現地入りしたことには反省すべきことであった。

天気予報とも関連して、日本を出る前に、北半球の高層天気図（500hPa）を1ヶ月ほど前からの期間について調べてみた。500hPa天気図は、対流圏全体の状況を代表する高度の天気図であり、同時に今回の登山地域の高度でもある。さらに中国も含めて北半球全域の天気状況の変化を知ることができるなどの長所がある。調べた結果によると、中国南西部のあたりは等高度線がない分布が続いており、中緯度の天気変化の主な要因である偏西風波動域は緯度40度付近より北に位置する状態が続いている（図1）。このような状態がいつまで続くか、いつどのような変化が生じるかが、登山期間中の天気を予想する基本的な目付け所になるはずだと考えていた。

今回は、①このような天気図の状態はなお持続する、②少し北に離れてはいるが偏西風波動域の気圧の谷や峰の影響はあり得る、という2つの予報則を考えた。結果的には当たった面とはずれた面とがあった。

天気の観測は、目視による雲量、雲形、風向（上空とBC）、大気現象などについて行ったが、定時的には行わなかった。BCでの気温と湿度の観測は、株式会社チノー

製の温湿度カードロガーというハンディーな自記観測器によって、15分間隔で行った。

3. 登山期間中の天気と気象現象

今回の登山期間中の天気は、杉村総隊長が登山計画書の趣旨の中で“季節は天候の安定する秋期（9~10月）”と予想したものにほぼ一致したものであった。

BCに入った頃は穏やかなよい天気で、高層天気図で予想していたものと一致しており、先に示した方針で予報できると考えていた。しかしやがて2つの少し予想に反する事実に気づいた。

ひとつは、上空の風が終始南寄りであったことである。事前の予測によれば無風的な状態か、北の偏西風域の影響を受けて風はさまざまに変化するはずであった。



図1 出発前の天気図(9月20日)

いまひとつは、局地的な気象擾乱がしばしば生じることであった。天気はよいのに夕方頃から東の山を乗り越える雲が流れ出してきたり、夜半に急に雲が出て時にはにわか雨が降るなどの現象がみられ、予報屋を悩ますものとなつた。とくに登山前の10月1日は期間中最も悪い天候となり、翌日の登山が中止になるほどであった。また10月9日から11日にかけて霸王山の西の谷にトレッキングをした時、深い谷を埋める厚い雲海を目の当たりにして、驚かされるとともにその成因に頭を捻らざ

るを得なかった。一夜、この雲海が上昇してテント付近が雲の中に入ったり、にわか雨や強い風に見舞われたりした。この時の悪天気も広い範囲の現象ではなく、局地的でかつ時間的にも短いものであった。

とはいっても、全般的な天気のよさや安定性からは、このような悪天候がさらにひどくなるとか、持続することは考えられないという判断から、10月3日の登山の決行については現場の判断を尊重するという前提で同意した次第である。結果的に、この判断が間違っていたことは、幸いであった。

4. 帰国後に調べたこと、考えたこと

a. 好天と上空の南風の機構

帰国後、出発した後の高層天気図資料を気象台から入手して調べたところ、天気図に9月24日頃（図2）から変化が生じていることが分かった。図からわかるよう

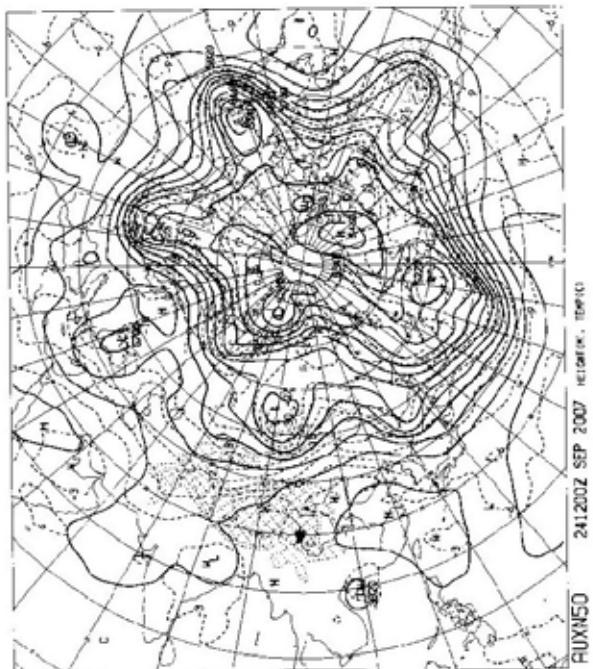


図2 変化が現れた天気図(9月24日)

に、変化は2つあり、ひとつは日本付近を覆っていた高気圧の領域が西に張り出してきたことである。この高気圧の張り出しは登山期間中強弱を繰り返しながら続いた。いまひとつは偏西風波動の大きな気圧の谷がヒマラヤを越えてインドの西方付近に南下し、そこに停滞するという変化である。BCで疑問に思った南寄りの風は、西方の広い気圧の谷と東方の高気圧域の間に挟まれた結果と考えると納得できる。

このような気圧の谷の南下と停滞や、広い高気圧域の存在が、時期的に一般的にみられることがあるかどうかはまだ調べていない。とくにこの地域はモンスーン域の北限に位置しているようであり、ポストモンスーンに該当する今回の時期に、このような気圧配置が一般的にみられるかどうかや、その機構については確認しておきたいことがらである。

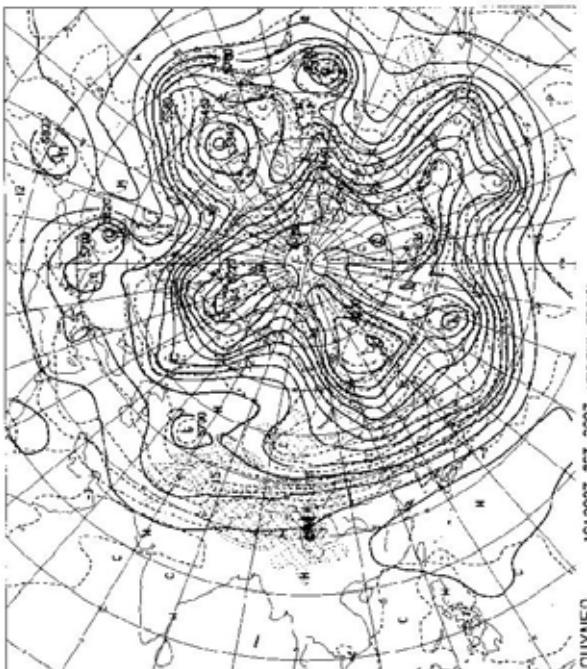
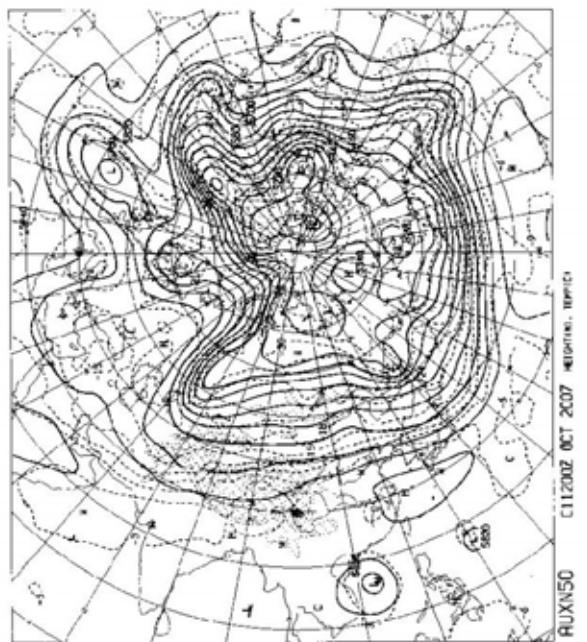


図3 悪天日の天気図
(上:10月1日、下:10月10日)

気圧配置は出発前の予想したものから変化したが、登山活動に大きな影響を与えるようなものではなく、そのような状態が安定的に持続して杉村総隊長が予想したような天候が期間中続いたことは、今回の登山にとっては幸いなことであった。

b. 局地的な擾乱の機構

局地的な擾乱については機構も含めて分からぬことが多い。擾乱の範囲が広くはなさそうであること、時間的にも比較的短時間の現象であることが多いという特徴から、高い山と深い谷が重なる、この地域独特の地形的な条件がつくり出す局地的な現象ではないかと考えられる。夜半に雲が出たり、にわか雨が降ったりすることは、ヒマラヤ高地でモンスーン季に知られている谷間と高地との間に生じる局地循環による雲や降水の発生と類似している。しかし今回は時期的にはポストモンスーンであり、ヒマラヤとは異なる山岳効果を考える必要があると思われる。

500hPa天気図と悪天候との関連を調べたところ、偏西風域が接近したり、強まる時期にみられるようである。最も悪天となった10月1日と霸王山の北側へのトレッキングで悪天に見舞われた10月10日の天気図を図3に示す。これらの擾乱と山岳地形との関係の詳細も今後の興味ある課題である。

c. BCでの気温と湿度の観測結果

BCで行った気温と湿度の測器はBCの側につくられていた小屋の陽の当たらない、風通しのよい軒下に置かせてもらった。観測はBCに入った翌日の9月26日9時から下山する10月13日の9時まで、18日間連続して行った。

この期間全部の観測記録（図4）をみると、期間中の天気のよさを反映して気温、湿度ともに規則正しい周期変化をしている日が多いことがわかる。気温は17時前後に最高となり、08時前後に最低となることが多く、湿度は17時頃に極小となり、08～10時頃に極大となることが多かった。なお、これらの時刻は日本の標準時の経度（135°）と現地（102°41'）との経度差が30°以上あることを考えると、中国での標準時よりさらに1時間早く考える必要がある。それにしても日本での平地の気温や湿度の変化と比較すると、気温については最高気温と最低気温ともに発生時刻が遅い。湿度も同じことがいえる。これはBCが谷間に位置しており、日出や日入の時間が違うことによるほか、局地的な循環の効果もありそうであるが、詳細はわからない。

局地的な擾乱の発生や通過の影響は、気温と湿度にもみられることがわかる。とくに今回の一番の悪天となった10月1日から2日の午前にかけては、気温の低下と湿度の増加がはっきりみられ、それぞれの変化の幅も小さい。

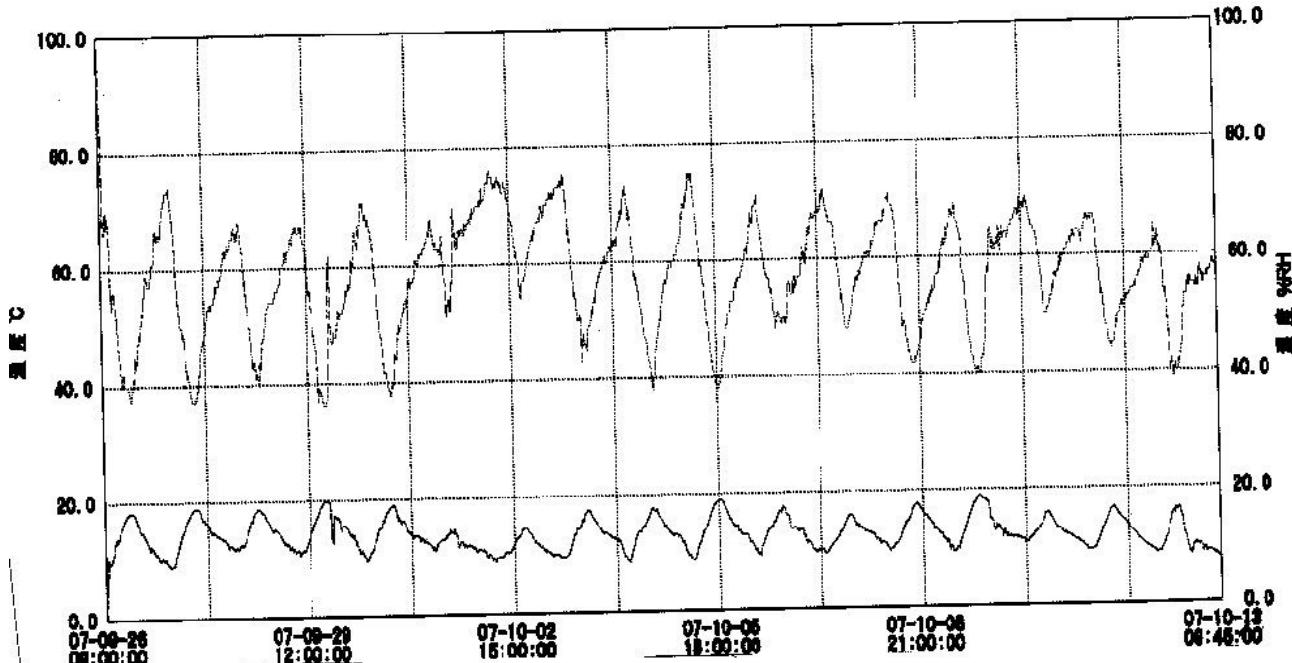


図4 BCでの気象変化(9月26日～10月13日)(上:湿度(%)、下:気温(°C))

d. 登攀時の気象

霸王山の登山は、10月1日の悪天の影響が残る10月2日の午後にBCを出発することから始まった。午後には天気の回復がかなりはっきりしてきたことや、全般的な好天の状況から悪天は長続きしないと予想されたためである。ただあまり信頼のない予報官の判断に従ったというより、名越ほかの登攀隊員の長年の経験と少し位の悪天候はものともしないという意志が出発をうながしたというのが正確である。

図5は、登攀隊が霸王山の山頂を目指していた10月3日の天気図である。図3の10月1日と比較すると、東の高気圧域が拡大しているほかはあまり違いはわからない。霸王山山頂で登攀隊員が危険な状況に置かれていた10月3日の夜一晩中寒風が吹き募るという状況も天気図からは伺えない。

ただ、気象観測データによると10月4日の朝（8時）のBCの気温は、8.7°Cと登山期間中最最低であり、湿度は72%と比較的高い状態であった。これは山頂でのビバーグで直面した寒さと、早朝に見た真っ白な霜と矛盾しない。

いずれにせよ、天気図もなく、かつこの地域の山岳特有の気象変化についての情報もない中で、隊員達が直面した気象変化を予測することは困難であった。くり返しになるが、登頂の要因はこの時期の全般的な天候のよさと、なにより隊員達の強い意志と日頃の練磨の結果だといえる。

図5 登攀日の天気図(10月3日)



5. おわりに

帰国後に改めて天気図や気象観測データを調べたり、ヒマラヤ地域の気象やモンスーンの気象などについて文献をみたりして、事前の勉強と準備不足を痛感させられた。まことにほかの隊員には申し訳ないことだと思っている。

これまで手元の文献などを見た限りでは、ヒマラヤについては昔からそれなりに調査研究がなされているが、横断山脈地域の気象についてはあまり詳しい研究はされていない。今回お世話になった四川大地探検有限公司の方に聞いたところでも、この地域の気象についての情報はあまり持っていないようであった。

ヒマラヤ高地からすると偏西風の風下に位置し、かつアジアモンスーンの影響を受けるこの地域は、気象学的にももっと調べられてよい地域だと思われる。また今後この地域を目指す登山家にとっても、この地域の気象の基本的な性状を理解しておくことは意味のあることだと思われる。わたしも微力ながらそのような調べをして、今回の遠征に参加させてもらった恩返しができればと考えている。



石筍池より傘雲の霸王山

霸王山周辺地域の人々の生活のこれからについて考える

宮田賢二

1. はじめに

19年前にチヨモランマ登山に同行して行ったチベット、8年前に行ったタクラマカン砂漠のどちらの旅でも関心の中心はそれぞれの特異な自然にあった。今回、学術調査隊に名を連ねることになり、自分の専門の気象やほかの自然に加えて、人々の生活や文化にも目を向けることになった。

具体的な案は、学術調査隊の課題の話し合いの席で、メンバーの田中さんが提案した計画案をベースとして、ほかの隊員の意見も取り入れてつくられた。その中に私なりに温めていた生活についての案も加えてもらった。生活にかかわる調査の要点は、現地の人々の衣食住ほかの生活の実態を調べることであったが、計画の中に素人くさい分かりにくいや表現のものが含まれているのは、私の考えを盛り込んだ箇所である。

生活実態の調査は基本的に各隊員の興味や関心にしたがって行われており、ここでは私なりの関心を中心とした調査結果について報告する。

2. 調査課題を変更したわけ

自分なりに考えた調査のポイントは、衣食住などの生活の実態がどのような構想や考えに基づいてつくられているか、ということにあった。生活のデザインあるいは設計、さらには経営的な面についてである。それは具体的には生活に必要な物やサービスを手に入れる方法によって実現され、表現されることになる。分かりやすくいえば、収入を得る方法と支出の内訳と方法である。

ところが成都からBCに向かう自動車の旅で窓から見える少数民族の村々の様子や、BCに入る谷で一泊させてもらった村長の家の暮らしの様子、そしてBCを設営した高地で暮らしている老夫婦の生活などに接して、それらが長い時間をかけて形作られたものであることを実感するにつれ、生活のデザインや設計などのとらえ方は人々の生活実態にそぐわないと思わざるを得なくなった。

その理由については後から考えて分かったことであるが、生活のデザインのような考え方を適用できるのは、今のわが国のような高度に社会化した生活の場合であつ

て、霸王山周辺地域の人々のような、基本的には自給自足的な部分を多く残しているような生活では、生活のデザインは長い年月を掛けて創意工夫と試行錯誤を繰り返しながらなされてきたと考えられ、現在の生活はそういう長年の努力の成果ともいべきものだといえる。生活のデザインは生活全体の中に深く浸透しており、それを取り出して分析しても人々の生活をとらえる有効な方法にはならないと思われた。むしろそういう年月を掛けてつくられた作品ともいるべき生活の実態を、きちんととらえることの方が意味があるといえる。

ということで、当初の考えは早々と頓挫することになった。しかしいくつかのことがらがきっかけとなって、次第に別の課題に気づくようになった。きっかけになったことというのは、たとえば現地に入る前に通過した成都の変貌の大きさである。ガイドの鄭さんらの話から現在中国の多くの都市では都市再開発の波が押し寄せており、成都も19年前に見た古都らしい落ち着いた雰囲気は失われ、経済成長の只中にある活気に満ちていた。また長い自動車の道中で通過した万里の長城のような道路のつくられ方、自動車の多さや運転のすごさ、あるいは伝統的な家々にパラボラアンテナが必ずといってよいほど備わっていること、電線がどんな奥地にも設置されていることなどである。

これらのそんなに昔に生じたとは思われない変化と、昔ながらの村々や行きかう人々の様子とを対比するうちに、両者の違いの大きさに自然と目が向くようになった。これらの新しい時代を象徴するような変化が生じる中で、伝統的な生活がこれからどうなるのだろうか、という問い合わせ頭から離れなくなった。現地の人々が保持している生活の実態を知ることも大切だと思う一方で、将来の生活に关心が向かうようになった。伝統的な生活のデザインという当初のねらいは頓挫したが、こういう変革の中で生活のデザインはどう変わるだろうかという新しい調査課題が浮上することになった。



かつては電気も來ていた冬牛棚沟

3. 新しい調査課題－人々の生活のこれから

a. 変化の背景と方向

成都の変貌の背景には1978年末から始まったとされる中国の改革開放政策があることは間違いないだろう。都市の開発の動きや、都市を中心とした現在の中国の驚異的な経済発展については新聞等で知つてはいたが、地方での道路建設や開発の実態については今回の旅で初めて知り、強い印象を受けた。都市や地方で起った変化はむろん産業の発展だけではない。それは当然人々の生活にも大きな変化と影響を与えていたはずである。同じような変化や影響は実はわれわれ日本人がすでに経験している。1970年代の高度経済成長の頃に、生活もまた大きく変った。都市的・消費的・物質的な生活が日本人の生活様式の基本となったことはまだ記憶に新しい。それと似た変化が起ころうとしているのではないかと思った。

b. 生活変化のこれから

では霸王山周辺の人々の生活は、これらの事態や変化によって今後どのように変わる可能性があるだろうか。人々の生業は農業・林業・牧畜など、いわゆる第一次産業である。しかも規模も大きくなさそうである。これらの産業はかつての日本の農業がそうであったように、今日的な工業やサービス業などに伍して行くには、多くの課題を解決することが必要である。たとえば都市での旺盛な消費に応えることも今後の方策としてあり得るが、そのためには道路や流通などの基盤整備が必要となる。しかしあの高い山と深い谷からなる横断山脈でそういう今日的な経済のしくみにうまく対応するのは至難のことのように思われる。



究極のシンプルライフ（生活用具のすべて）

ヤクの放牧地で見た廃屋や、唐さん夫婦が後継者がないままに今年の春には下山する話などを聞くと、ヤクなどの牧畜や農業を中心としてつくられてきた伝統的な生活のデザインは大きく変わらざるを得ないように思われる。

霸王山登山の後訪れた日隆やそのほかの観光地では、観光を地域の新しい産業と位置づけているようである。確かに観光は豊かで魅力的な自然を持つこの地方の新しい産業としての可能性を持っている。しかし今回見た印象ではそういう産業が地域と結びついて育っているようには思われなかった。魅力的な自然という地域の財産を有効に活用するとしても、今後解決すべきことは少なくないよう思われる。



ヤクに塩を与える黄おばさん

c. これから的生活のあり方

BCで見た唐さん夫婦の生活は、今日のわれわれが見失った多くの好ましさを持っている。ゆったりとした、マイペースの、豊かな自然の中での、こせこせしない生き方は、成都や今日の日本の都市での生活と比べると、まるで別世界のようにもみえる。現地でも感じたことであるが、実はわれわれ日本人も高度経済成長以前はそれと似たような生活をしていた。唐さんらの風貌や举止をみると、かって夏休みなどに行った母親の実家の田舎で見た人たちと実によく似ていると思った。実はそれは田舎だけでなく、都市でも人々は同じようにのんびりしていたように思う。

その後の日本と同じような変化をこの地方の人たちも歩むべきであろうか。確かに生活は豊かに、便利に、快適になった。しかし生活の収入を支える経済のしくみはけっして安定しているとはいえない。豊かな生活はそれに見合う収入が必要である。地域や人々の間の格差は大きくなっている。環境や資源の問題もそれに付随して

生じている。そのほか犯罪や自殺の増加など、人々の精神的な面での問題もある。困ったことに、これらの問題に対する解決策はいまだに明確になっていないのが現状である。

放っておくと、霸王山周辺の人々の生活は多かれ少なかれ、成都的あるいは今の日本の生活に変わる可能性が大きい。しかし上に指摘したようにそういう生活は多くの問題がある。ではどのような生活を目指すべきなのか。

かってののんびりした自然と密着した生活を保持すべきだろうか。しかしそういう生活を若い人たちが受け継ぐことはむずかしいと思われる。今日の生活や生活を支えるしくみの問題点を除き、よい点は残し、同時に霸王山周辺の人々の生活のよさを残すような新しい生活としくみを見出すことができればよいのだが、それは至難のことであろう。とはいえ、そういうあり方を見出さなければ人類の将来が危ういように思われもする。

4. おわりに

今回、生活のデザインという視点だけを頼りに周辺地域の人々の生活調査をしてみようと考えて出かけたが、途中から人々の生活のこれからという課題に関心が移つた。生活のデザインという視点は同じだが、伝統的な生活のデザインからこれからの生活のデザインがどうなるかという課題についてあれこれ考えてきた。

その結果、改革開放の波に洗われつつある今日の中国は、都市も地方もかつての日本が歩んだのと同じような道を歩む可能性が大きく、さらに将来には今日のわが国がかかえているのと同様の課題に直面する可能性があるという予測を得た。

かれらのこれから的生活について考えた結果、われわれ自身の生活のこれからという、同じ問いに到達した。皮肉なことともいえるが、この問いの答えはわれわれも得ていない。

最後に、帰国後中国について書かれた本や新聞記事などを見るにつけ、短い滞在期間の、限られた地域と人々に接しただけの知見から、ここに書いたようなもっともらしい議論をするのは正直なところ、時期尚早だと思っている。ひとつの仮説的な考え方として大目に見ていただければ幸いである。

学術調査;草原を白馬に乗って!

那須正義

登攀隊が霸王山をアタックの間、我々調査隊（田中隊長、那須）は4・5日かけて古いソ連製の地図に載っている村落を訪ねて調査の予定であった。地元で聞くと、

“村落は無くなつて、ヤクの放牧場になり、道路も崩れ放題、馬も通れない。”との事で予定を変更せざるを得なかった。（後程聞いたが、政府の改革、解放政策の一端らしい）

BCから遠くに広大な草原が見える。又、9月29日調査隊3人（杉村総隊長、田中調査隊長、那須）とガイド、通訳で踏査に登った（4493m）時、この草原が石筍山に連なつており、また、霸王山が正面からより近く見え、二つの山が一枚の写真に納まるかも。又 草原の以奥に何が有るのか興味津々の思いを馳せていた。馬を飼っているBC隣の唐（タン）さんに、馬で案内してくれないか打診した。怪訝そうな顔をして私の顔を見て、今までに乗馬の経験を聞いてきた。（私の年齢を知つてか。それとも、9月24日荷物運搬時飼い主の唐さん、この馬に踏まれて負傷したというその暴れ馬か？）乗つたはあるがあまり歩いた事が無いと言うと笑いながら渋々承諾した。そして“下りは危険だから歩くか”と付け加えてきた。4時間拘束で150元と話を決めた。

10月7日、朝の気温4度C、暖かく頗る天気が良い。ヤソグは、昨日に続いて休養日である。体調が良いので白馬に乗って、ハイキング気分で調査に出る事にした。



乗馬試験に合格！いざ出発

9時20分、物珍しさで休養している隊員が見送ってくれた。馬は白馬で小柄だ。聞いてみると、蹄鉄は履いてない。手綱、紐類、鞍の殆どがヤクの毛で編んである。鞍の革はヤクの毛が付いた儘の毛皮で、金物以外は総てヤクを役たてていた。少し歩き始めると、生草ばかり食っているのかオナラの連續だ。

第一発見；3分程歩くと立ち止まって大息、20~30歩歩くと又立ち止まる。これの繰り返しだ。聴くと空気が薄いらしい。第二の発見；50~60cmの岩が点在する沟（ゴウ=谷）に出た。大きな瓦礫の中を平気で通った。第三の発見；ヤクの又タ場ではストックの先が滑る位硬い土質で、登山靴でやっと歩ける急傾斜を、ものともせず横切った。第四の発見；背中に70kg近い荷物を背負っているので坂道はジグザグで進む。一つ目の沟を過ぎ小さな尾根に出た。ヤクが20頭位の群れで怒濤の如く突進してきた。遠くの高いところで群れのリーダーか、大きなオスが身じろぎもせず睨んでいる。唐さんが、預けていたストックを振り回して追い払った。二つ目の沟は、5日に石筍山から悪戦苦闘の末、帰った所だ。よく見ると人が歩けるとはとても思えない。唐さんに言うと大きな声で笑った。

標高4100mの地点で草原の中腹に出た。左下流には300~400m、右上流に向かっては1000m以上も有ろうか、また、正面は少しへこんだ窪みがあり、其の向こうは大きく競り上がって草原が広がっている。

草原のあちこちで100頭以上もいるかヤクの群れが見える。20頭位の馬もいる。BCの近くの群れと別らしい。我々を見付けた40~50頭のヤクが突進して来た。好奇心か、塩のオネダリか、先頭は子供と小柄な雌で、手の届くところまでやって来る。真っ黒から顔だけ白いのもいるし、ホルステインのように白い部分の多いのもいる。高い所から大きな1頭の雄が、大きな角を見せ光させて威圧している。

唐さんが正面の端まで行くのかと、指差し聞いてきた。是非行きたいと目で合図すると、白い歯を見せて頷いた。白馬は相変わらず大息をつきながら、止まつては進みの繰り返しだ。10時55分、草原の端（4200m）に着くと正面が開けてきた。

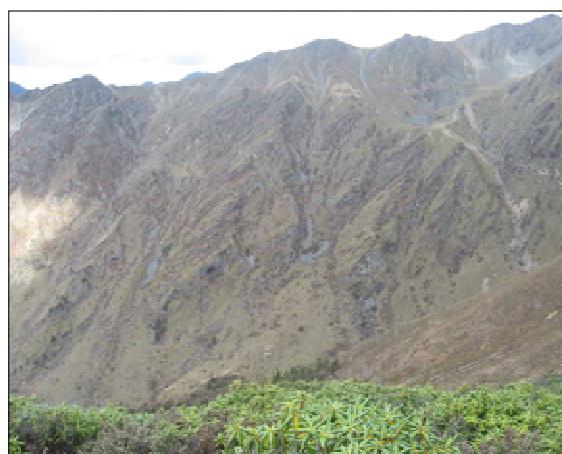


左・石筍山、右・霸王山が・・

右に霸王山（バウシャン）、左に石筍山（スシシャン）が見えてきた。思ったとおり、二つの山が一枚の写真に納まった。

正面は凄いパノラマだ。見渡す渡す限り、槍ヶ岳、穂高の連続だ。手前の山の斜面で、岩の露出の多いところは、コケに覆われているのか、黄色身をおび、落葉樹か、やや赤く染まって点在している。反対側の傾斜の緩い斜面には、緑の濃いヒマラヤ杉を主とした常緑樹が、太陽に照らされて、凄い景色だ。斜面は、沟（ごう）の底まで1000mは裕に有りそうだ。

中国版、グランドキャニオンだ。



峠を越えると、風景は一変する

景色が広過ぎて、写真で表現出来なくて残念です。

30分程で、ガレ場4400mに着いたので馬の餌が有る所で降りた。

此処から徒歩で200m程登って30分位、景色を堪能出来たのでした。此処では、近づき過ぎて、二つの山を一枚に撮る事ができなかった。

頂上の写真も雲がかかり、今一だった。

降りは、馬がジグザグで降りるので、私の徒歩とあまり変わらない。

草原には、小柄で真っ白いエーデルワイスと、よく目立つ濃い青紫のリドウに似た小さな花を踏みつけないように気配り？しながら、1時間10分ほどでテントへ帰着したのでした。

担当報告

歩外

(名越)

<国外>

現地エージェントは「四川探検旅遊公司」に決めていたので、前年の偵察の段階から全面的に協力してもらった。依頼したのは以下である。

登山許可取得、ホテル手配、空港迎え送り、
B C回りの用具、B C食及び行動食、生活用品買い出し、
通訳、コック、輸送全般、彭現村及び霸王山周辺の事情調査と便宜供与依頼、

登山許可 :

H A J (日本ヒマラヤ協会) からたびたび中国国内での許可及びビザについての注意が喚起されていたし、夏には無許可の隊が中国公安に逮捕されたという報道もあったので、その点についてはエージェントに何度も確認をとった。

四川省内の山なので登山許可是四川省登山協会が発行し、登山料金も同協会が決めている。

未踏峰の場合6千m未満は通常（一人）\$ 90～\$ 60だが、ネームバリュウがある山は2千ドルの値がつくとのこと。霸王山はあのエリアの盟主峰なので本来それに値するとのことだった。

我々はついでに隣の石筍山（5183m）も登ったので、田中・那須の2名が登山料（1人\$ 60）を支払い証明書を発行してもらった。

（なお既登峰は、一人\$ 30）

登山協会 :

3月の我々の申請を見てあのエリアのことを知った？四川省登山協会は5月に彭現村に偵察隊を送り、村長宅から見える石筍山への登山計画を協会のホームページに載せていた。偵察隊は石筍山西の峠を越えて（我々も後半の大遠足で越えたが）北面の調査もしており、我隊の初登頂にはさぞかしがっかりしたことだろうと思う。

中国の各省にある登山協会は旅行エージェント業務も行っており、民間のエージェントと競合している。今回も我々のB Cに協会から数人のトレッカーが送り込まれ、

B C～石筍山あたりのトレッキングをして帰ったとのことだった。

買い出し／調達依頼 :

中国持ち込み隊荷を、預け手荷物の範囲（20kg）に収めたかったので、生活用具等なるべく成都にて調達することとした。

BC回りはもちろんのこと、隊員の消耗品からアタック食以外の食事（行動食のアレンジまで）すべてをエージェントに依頼した。四川探検旅遊公司のオーナーである張小宏さんは中国きってのクライマーだし、スタッフにも登山家がいるのでかゆい所に手が届くような仕事ぶりだった。

ついでに、B Cでの食事には中国内で採れる日本米（2～3倍値？）を調達してもらい大好評だった。

輸送 :

いつもの成都～臥龍～日隆のルートは工事のため通行止めであり、雅安から北上する夾金山経由のルートとなつたが道はこちらの方が良かった。

隊員+通訳2名+コック+隊荷はマイクロバス1台、ランクル1台で彭現村村長宅まで1日半。

そこからは馬6頭の（片道4時間）3往復でB C建設。

小金県の山間部への入域規則 :

「外国人の山間部への入域に際して地元のガイドを付けなければならない」という規則は（四姑娘山エリアにおいても適用されたので）小金県全般と思われる。今回は村長の兄がB Cまで随行してくれ、B Cからは唐さんが名実ともにガイドを務めてくれた。

彭現村への入域者 :

2007年9月までの霸王山エリアへの学術調査／登山目的での入域者は、

外国人では60数年前に日本人（冬牛棚沟まで；氏名不詳）、2005年日本人（同；大川健三）、2006年日本人3名（同；名越實他）

中国人では2007年5月四川省登山協会（彭現村～黄土梁峠越え；高明 他）

環境面：

気になったことがある。

日隆のホテルで見たゴミ処理の酷さが現在の中国の国民意識なのだと想われるが、（そこが美しいかどうかに関係なく）自然の中に平気でゴミを置き去りにしている。我々のBCにやってきた中国人パーティや、石筍池に初？の観光客としてやってきていたパーティは自分たちの出したゴミを持ち帰るという意識が無いものと思わざるをえない。

3～40年前の日本を考えれば偉そうなことは言えないで目についた所は可能なかぎり処分させていただいた。勿論我らがキャンプの回りや石筍池付近も「来た時よりも美しく」を合言葉にゴミの持ち帰りをした。

四川探検旅遊公司の張さんによると、今ではツアー料金に「環境保護料」を加算しており、ちゃんとした旅行社ならゴミ処理はするはず。とのことであったがどこまで実施されているかは不明だ。

ちなみに我が隊が支払った「環境保護料」は260ドルと結構な額なので内訳に土地の使用料などが含まれているものと思われる。

<国内涉外>

10周年事業としての遠征：

1年前の役員会で兼森総務委員長より「10周年事業に何か遠征でも出さないか」との依頼があり、私的な計画を「日本山岳会・広島支部10周年事業」として取り上げていただくことになり、100万円の支援をいただくことも決まった。

学術隊として参加の決まった杉村支部長に総隊長を引き受けていただき、隊としての体制ができる。

遠征隊と学術隊の編成：

登攀隊員3名はすでに揃っていたので、まず登攀隊のみの隊として準備を進めた。10周年事業本部より、同行のBC要員希望者がいることをしらされ学術隊員と、本部の提案により短期の一般ツアーも募る。

BC定着での調査班2名はほぼ決まったが、踏査班が1名しかおらず急遽隊員を募集し、補強1名の入会・参加が確定したのは出発一ヶ月前であった。

なお一般ツアーへの申し込みは無く、BC訪問ツアーも参加者の都合が合わず中止となった。

遠征期間はビザの関係から1ヶ月。日にちは吉村の希望により9月22日～10月21日とする。



成都・花園城大酒店

各方面情報収集：

横断山脈なら今や世界的な権威であるJAC／横断山脈研究会の中村保さんに地図や地域情報をいただき、現地事情は四姑娘山公園管理人で写真家の大川健三さん、大雪／チョンライ山系の事情は横断研の西嶋鍊太郎さん、そして霸王山やギャロン地区、フィールドワーク手法等については「マッターホルンかフィッツロイの様な山」と言って私に火をつけた横断研の高田良一さんに一方ならぬサポートをいただいた。

JAC本部「海外登山助成金」の申請：

2006年内に申請し、委員会のご厚情により10万円を交付していただいた。

航空券手配／ビザ取得：

ダイヤモンドトラベル社にて広島発着の「中国東方航空」便の航空券と、ビザ取得。

（広島空港～上海にて同国内便に乗換えて成都）

往復（1名）101,000円

ビザ（1名）8,000円

空港税（1名）14,400円

会計報告

(名越)

国内費用: 装備、食糧等 382,000円
航空運賃 863,000円
124万5,000円

登攀隊については適宜隊員3人より徴収し、日本山岳会よりの海外助成金10万円も加えて装備などに充てていたが、学術隊が編成されて以後の諸費用は遠征隊の支出として区別しなかった。

国外費用: 215万8,500円

現地会計を那須さんに担当していただいた。
報告にあるように登攀隊と学術隊で違いはあるのだが(四川探検旅遊公司の請求書も分けてはあるが、輸送費、環境保護料、ガイド料、登山料等は登攀隊に括って入れてあるなど詳細には分けがたいので)同等の徴収とした。

霸王山国内会計

年月日	項目	収入	支出	残
2006/11/26	吉村 入金	10,000		10,000
	名越 入金	10,000		20,000
10月10日	地図コピー(¥80x12)		960	19,040
12月26日	助成申請用計画書コピー		600	18,440
	助成申請書JACへ送付		390	18,050
2007/1/19	松島 入金	10,000		28,050
1月24日	合宿食糧費(お試し)		5,220	22,830
2月13日	車代 (1/24-2/13)		16,000	6,830
	会費入金(3人×¥5,000)	15,000		21,830
3月2日	地図等資料コピー		2,700	19,130
3月29日	日本山岳会・助成金入金	100,000		119,130
4月12日	学術用資料コピー		1,620	117,510
4月17日	ケブラーx20m		5,430	112,080
5月24日	ハーケン、小シュリング等		14,649	97,431
6月5日	テント(EXP用3人用)		92,000	5,431
6月29日	吉村 入金	200,000		205,431
7月10日	ロープ、シュリング		70,000	135,431
8月17日	松島 入金	200,000		335,431
8月20日	那須 入金	200,000		535,431
8月21日	名越、杉村、田中 入金	600,000		1,135,431
8月28日	宮田 入金	200,000		1,335,431
8月29日	タガネ、カップ等		1,602	1,333,829
8月29日	ヤカン、アイスクリューx2本		13,800	1,320,029
9月12日	広島支部カンパ	1,000,000		2,320,029
9月13日	航空券、ビザ		863,000	1,457,029
9月16日	リチウム電池(単4、単3)		15,680	1,441,349
9月17日	国旗用クリアファイル		567	1,440,782
	食糧 等		44,261	1,396,521
9月21日	食糧追加(お土産)		8,925	1,387,596
9月22日	国外費として持ち出し		1,300,000	87,596
10月1日	10周年式典用写真プリント		20,170	67,426
11月8日	展示用パネル		1,940	65,486
11月25日	空港送迎(松島号)		6,000	59,486
	報告書、残務費用		59,486	0
	合計	2,545,000	2,545,000	0

まだ報告書や残務にかかる費用が不明だが、12月現在の残高をすべてこれにあてることとして会計を締めた。

* 総額340万円のうち100万円が支部会員、支部友会員のカンパであり、何にもまして強力な支援となった。それに地元企業である、株式会社サタケ、天野実業株式会社(アマノフーズ)による食糧の現物支援も大いに助かった。会計係としても心よりお礼申し上げる。(名越)

1 \$ = 7.5 RMB(元)

1 \$ = 114.5 円

1元=15.2666…円

【霸王山 現地会計】 (那須)

日本円

月日	費目	収入	支出	残高	備考
9 21	本会計(国内)より移転	1,300,000		1,300,000	
"	杉村、名越、松島、田中、宮田、吉村、那須、入金	700,000		2,000,000	
"	四川旅遊公司に旅行前金として前払い		2,000,000	0	
10 20	杉村 入金	20,000			
"	宮田 入金	20,000			
"	田中 入金 (登頂申請、証明含む)	30,000			
"	那須 入金 (登頂申請、証明含む)	30,000		100,000	
"	四川旅遊公司に不足金支払		90,000	10,000	
10 21	成都空港重量オーバー(元に振り替え)		※ 10,000	0	

中国元

月日	費目	収入	支出	残高	備考
10 12	杉村、名越、田中、宮田、松島、那須 入金	300元		300元	
"	唐さん チップ		300元	0	
13	金昆 Hotel in ポイチップ 6人		50	-50	
15	金昆 Hotel out ポイチップ 4人		20	-70	
15	茂県国際 Hotel in ポイチップ 4人		30	-100	
16	茂県国際 Hotel out ポイチップ 4人		20	-120	
"	華龍山荘 in ポイチップ 4人		10	-130	
17	華龍山荘 out ポイチップ 4人		10	-140	

"	九賽溝 Hotel in ボーアチップ° 4人			-150	
"	杉村、田中、宮田、那須 入金	200		50	
19	九賽溝 Hotel out ボーアチップ° 4人		10	40	
"	花園城 Hotel in ボーアチップ° 4人		20	20	
"	杉村、田中、宮田、那須 入金	200		220	
"	運転手 チップ°		200	20	
20	名越、松島 入金(10月13日分 含む)	30		50	
21	花園城 Hotel out ボーアチップ° 6人		50	0	
"	田中 入金	500			
"	那須 入金	400			
"	松島 入金	500			
"	宮田 入金	500			
"	名越 入金	300			
"	杉村 入金	250		2,450	
20	万さん (コック) チップ°		500		
"	鄧さん (運転手、社長) チップ°		300		
21	鄭さん 通訳 チップ°		1,000		
"	向さん 通訳 チップ°		300		
"	徳富さん 通訳 チップ°		300		
"	運転手(Hotel～空港) チップ°		50	0	
"	成都空港重量オーバー 追加金		720	-720	
"	日本円帳簿より振り替え ※10,000 円	620			
"	杉村さんより 入金	50			
"	宮田さんより 入金	50		0	

(10月21日 17時会計報告;チップに対する出資金に個人差額が生じたが登頂の成功に免じてご赦免の了承!)

記のとおり、現地における会計の報告いたします。 那須 正義

<四川旅遊公司よりの請求書>

<登攀隊>

四川大地探検有限公司 四川登山費用予算表

団号	2007 四川省霸王山登山隊予算
期間	2007年9月-10月
経路	小金県霸王山(5551m未踏峰)

人数	3名
日数	約28日間
ホテル	2部屋

台帳:2007年10月20日 編號:20070901

(1\$=7.5RMB)

費用項目	経費明細	標準	数量/単位	数量/単位	金額	備考
	日降	\$ 50.00	1 部屋	1 泊	\$ 50.00	
	塔公	\$ 35.00	1 部屋	1 泊	\$ 35.00	
	康定温泉ホテル	\$ 41.00	1 部屋	1 泊	\$ 41.00	
観光入園費	長坪溝 US\$10/人、	\$ 10.00	2 人	1 回	\$ 20.00	
保険	\$10/人	\$ 10.00	3 人	1 回	\$ 30.00	
車両使用	①送り@成都/村/成都:バス ②送り@成都/村/成都:荷物車 ③吉村さん迎えに ④成都/康定/成都 □日降康定 車レンタル	\$160.00 \$100.00 \$100.00 \$100.00 \$165.00	3 日間 3 日間 3 日間 3 日間 1 回	1 台 1 台 1 台 1 台 1 回	\$ 480.00 \$ 300.00 \$ 300.00 \$ 300.00 \$ 165.00	*実際走行距離により精算 (10月8~10日)
登山許可費	小金県霸王山(5551m未踏峰) 無名峰5000m級(未踏峰)	\$ 60.00 \$ 60.00	3 人	1 登	\$ 180.00	
	登頂証明書手数料	\$ 27.00	5 人	1 枚	\$ 135.00	
キャンプ手配費用	環境保護料 山間現地ガイド	\$ 260.00 \$ 21.00	1 人 1 人	1 登 11 日	\$ 260.00 \$ 231.00	
山間輸送費用	馬(出合/BC)81.6頭×2 + 途中2頭 馬(出合/BC)81.0頭×2	\$ 20.00 \$ 20.00	34 頭 20 頭	1 登 1 登	\$ 680 \$ 400	
追加料金	登山隊@成都買い物	\$ 270.00	1 回	1 回	\$ 270	
						-
				合計:	\$ 8,767	

制表: 四川大地探検有限公司 張少宏

<学術隊>



団号	2007 四川省霸王山学術調査隊
期間	2007年9月-10月
経路	小金県霸王山(5551m未踏峰)

人数	4名
日数	約28日間
ホテル	2部屋

台帳:2007年10月20日 編號:20070901

(1\$=7.5RMB)

費用項目	経費明細	標準	数量/単位	数量/単位	金額	備考
総合サービス費	内訳は下記	\$ 60.00	4 人	28.0 天	\$ 6,720.00	
	・全食事(隊員の高所キャンプ食を除く) ・BC設営用具類など必要共同装備 ・テント4人分 ・マットレス4人分 ・炊事用具 ・通訳や、キャンプスタッフの費用					
宿泊費	成都:花園城大酒店 途中: 日降: 九塞溝、黄龍、ホテル	\$ 55.00 \$ 25.00 \$ 50.00 \$ 78.00	2 部屋 2 部屋 2 部屋 2 部屋	3 泊 1 泊 2 泊 4 泊	\$ 330.00 \$ 50.00 \$ 200.00 \$ 624.00	
					\$ -	10月紅葉季節一番高い時期
観光入園費	九塞溝 + 長坪溝 + 黄龍 US\$69/人	\$ 69.00	4 人	1 回	\$ 276.00	
保険	\$10/人	\$ 10.00	3 人	1 回	\$ 30.00	
車両使用	送り@成都/村/成都: 成都/村/九塞溝/成都:8日間	\$160.00	8 日間	1 台	\$ 1,280.00	*登山隊車両費に含まれる
キャンプ手配費用			人	隊	\$ -	
山間輸送費用			頭	隊	\$ -	
				合計:	\$ 9,510	

制表: 四川大地探検有限公司 張少宏

タクティクス

(名越)

横断山脈の山々はミニアコンガ山群を除いて7千mを超えるものはないし、ほとんどが6千m前後で峻険な山容であることから、アルパインスタイルでの登攀とした。横断山脈研究会の仲間による情報と、前年の偵察から地域的に新鮮な霸王山に目標を定めたが、いまいち山の様子はつかめなかった。

26km南の山頂からの様子（残念ながら写真はなかつた）を綴った高田さんの報告と、四姑娘山管理局の人で写真家の大川さんよりの写真（30km南南東の海子峠からの遠望だが、帰国後大川さんより他の山塊との指摘を受けた）、それに私がガスの向こうに垣間見た印象から大まかにルートを想定したが実は心もとないものだった。

高田さんの報告書には「雪をかむったフィツツロイ」とあったので、ミックスの登攀を念頭に広島近郊で岩稜の上り下り、大山では長距離のアルパインや縦走を、3人（ときには2人）で繰り返した。

おぼつかない情報から描いたタクティクスは、喇嘛沟上部の氷河から前衛峰（別山）とのコルに至り、南面のミックス壁か稜を登攀し、最上部雪面から頂上に至る。標高差千m、登攀部分500mと想定した（実際：800m／300m）。

大まかには、BC入りから一週間でアタックにもっていく。氷河モレン上にAC（アタック用キャンプ）を建ててそことBCを2～3度往復・就寝し、BCで休養した後BCから一気にACを経由し、別山コル～頂上～下山を6日以内に済ませる。というものであった。

現場での偵察の結果、ルートは初期通り別山コル経由の南陵とした。入山時は（岩・雪）ミックスだった岩稜もすっかり雪が落ちてしまい、快適？な岩登りとなつたため、一応最上部ミックスのため持って行ったアイゼン・ピッケルの出番も無かった。

具体的には、休養後朝BCを出発し、ACの荷物を取つてそのまま別山のコルに至り宿泊。

次の日テント・炊事用具などはコルにデポして、一気に南陵から頂上を往復し、コル泊まり。あわよくばACに下山する。ということにした。

さらにACにて踏査班の田中・那須と合流し、尾根続きの石笋山にも（初）登頂する。というオプションも加味した。（実際には登頂記に書いた様な顛末である）

食糧

(松島)

BCでの食料はすべてコックが担当した。その調達から調理の一切を任せた。お陰で毎日美味しい中華料理をいただくことができた。高所用の食料のみ日本から準備した。

高所用の食料は栄養価が高く、十分なカロリーは勿論であるが、最優先は軽量化であった。そして湯を沸かすだけで調理が不要な食品。前回のテンカンポチエ峰遠征で究極の選択をし、すでに方針は決まっていた。乾燥米とフリーズドライのみそ汁やスープ類と丼の素、これが基本である。

広島県には優秀なメーカーがある。乾燥米は東広島市の（株）サタケのマジックライス、フリーズドライのみそ汁・スープ類は福山市の天野実業（株）である。今回の遠征では両社より多くの商品を提供いただいた。マジックライスはお湯や水をかけるだけでおいしいご飯となる。湯をかければ15分で美味しいふくらとしたご飯ができる。今回は夕食に白米、朝食に五目ご飯を利用させていただいた。98年の岳連天山遠征隊からずっと愛用させていただいている。高所の主食としては申し分ない。みそ汁・スープ類はアマノフーズのフリーズドライの即席みそ汁とスープである。10gから20gの超軽量で、なおかつ美味しい。湯を注げば瞬時にでき、アウトドアには最適である。アマノの即席みそ汁は種類が豊富で、本当に美味である。高所食は朝夕が約150g程度ですむので驚きである。地元の優秀企業にまさに最高の商品を提供いただき、感謝の気持ちでいっぱいである。

行動食はクラッカー類・ビスケット、飴、チョコバーを日本で購入し持参した。高所用以外は旅行社に任せて中国で現地調達してもらったが日本から持参する必要がないほど、種類が豊富で美味しい物が準備されていた。



大好評のサタケ&アマノフーズ食品

装備について

(名越)

《登攀隊》

このたび候補に挙がったエリアの山の標高は5千～6千mであり、時期的に降雪もあまりなく、おおむね尖っており岩登りが主となる登山と思われたので、最初から「アルパインスタイル」を想定したタクティクスを組んだ。

したがって「ポーラシステム」に比べると心配になるくらいの量であったが、一応予想されるシーンに備えたギアは必要量をBCまで持つて行き山とルートに合わせて登攀直前に最終持参装備を決めることとしたので、日本出発時30kgほどにはなった。

各自の個人装備は軽量化を厳命したこともあるってシュラフ、ザック、ピッケルからライトに至るまで新調を余儀なくされた（者もいた）。

ロープ：

3人なので60m2本でもよかったです下りのラッペルで結び目によるひっかかりや落石を避けるためと、何らかのアクシデントで障害者を降ろすことになった場合に一気に120m降ろせる等で、エーデルワイス社の新製品＜オキシジョン＞(8.2mmφ)を120m特注して、二つ折りにして使った。（勿論半分の60mにはロープ用マーキングインクで印を付けておいた）このロープは一回のダメージでは切れてしまわない？というハイクオリティ製品（エッジストレングス）だったので2か所に深刻な傷を負ったが、ラッペルには耐えてくれた。

カム：

エイリアン=2（紫）、1・1/2（橙）、1（赤）、3/4（黄）、キャメロット=1（赤）、各1個づつ。

ハーケン：

カバブー（ナイフ・アングル）、チタンL型=全部で20枚。下りの支点用にほとんど消費した。

（重いロストアローの代わりにカンプ社のチタンL型を使用したが、食い込みが良いので抜くのが大変だった）

シュリンゲ：

すべてマムート社のケブラーコード=18本
(200mm, 600, 800, 1200, 1800mm
ループ各種)を惜しげもなく捨ててきた。

テント：

マウンテン ハードウエア社の<EV3> (3.24kg)
エクスペディション用、という御たいそうな（値段も）代物であったが、最終的にアタックには持って行かなかった。

「通気性がありフライ不要」ということであったが、生地がエントラント風で夏でも内側に水滴が付き、少し気温が下がるとテント内でポタポタしづくが垂れるという有様だった。強度はあるがそれほど軽くないし、快適でもなかった。

クライミングシューズ：

トップ用に1足（フィーレ社の寒冷地用）持参し使いました。

ガス：

成都にて韓国製EPI型の寒冷地用（プロパン混合）を入手してもらった。

ヤカン：

コッファセット用アルミケトル(1L) 1個。
湯をかければ出来上がる食品だけにしたので、その他にコッファなどは持たなかった。

シュラフ：

全員モンベルの軽量(650g程度)タイプを新調。

マット：

軽量化のためレッジウォーマを各自に合わせて切断して使用。(1500~1600mm)

ザック：

トップを軽量化（ほとんど空身に）するため、全員オスプレイ社のエクスプロージャ66にして、パッキングの詰め替えはせず、そのピッチの役目に応じて取り替えて背負った。

氷雪用ギアも準備していたが、ルートの着雪が予想外に早く融けたため出る幕はなかった。

《キャンプ用具等》

BC回り、キャラバン、全隊で使用する日用品等はすべて成都の旅行社にて準備してもらったが、まったく問題なかった。

新品の登山道具を使うのなら、成都で入手できるので輸送のことを考慮すれば現地で購入させるほうが（日本より安いものもあるので）有利と思われる。

{登攀隊・装備リスト}

①:中国で準備購入、／:あれ又はこれ

<p><共同> 《アプローチ／BC》(学術と共に)</p> <p>修理キット①、裁縫具キット、 軍手①、 双眼鏡、温度計、 リペアシート、ガムテープ①、 カッターナイフ①、鋏①、 筆記具、ノート、 アルカリ電池①、 医薬品(救急他)、 ラジオ(短波用) タオル①、布巾①、 スタッフバック、 石けん・シャンプ①、</p> <p><共同> 《登攀》</p> <p><登攀ギアは予想される物を BCまで持って行き、偵察等により アタックに携行するものと量を決める></p> <p>救急セットパック、 テーピングテープ、 スポンジ布巾、 テント一式、 バーナーヘッド、 スタビライザ、ブースター、 ガス7個①、 ヤカン、 地図、コンパス、 ライター①、 ポリ袋3~5枚、 食器3セット(ボウル、コップ)、 無線機、 ライヤペンチ、 ロールペーパ①</p> <p>ロープ(8.2mmφ×120m)1本、 予備ロープ(8.5mmφ×50m)2本、 ハーケン10本、 スカイフック、 フックハーケン、 アイスクリュー3本、 ワイヤストッパ1セット、</p>	<p><個人> 《旅行用／アプローチ用／BC用》</p> <p>ウェア一類、 アプローチシューズ、 帽子、 下着類(各替え)、枕、 ソックス(替え)、 日焼け止め、爪切り 持病薬、 地図①、コンパス、 ストック2本、 カメラセット、 傘①、カッパ、 洗面セット、 筆記具、手帳類、 整理袋、 BC用サンダル①、 携帯ティッシュ、 計算機、 お金(20万円以上)、 財布、パスポート</p> <p><個人> 《登攀》</p> <p>冬用衣類(下着・防寒具・ヤッケなど)、 スカーフ、 高所帽、 シュラフ(カバー)、 マット(最小限に切る)、 時計、 サングラス、 アルパインザック、 ヘッドランプ(単4電池用) 、整理袋、 ナイフ、ライター、 歯ブラシ、 しつこボトル、 ティッシュ、 ペットボトル／水筒(広口:300~500cc)、 スプン、はし</p> <p>アイゼン、 靴、ソックス(替え)、 グローブ類(替え)、</p>
--	---

カム小～中4個、
タガネ、ハーケン掴み
デッドマン2枚、
シューリング各種12本(セルフ兼用)、
予備ATC、
アブミ1本、
クライミングシューズ(1足)、
トップ用ギアコンテ、
標識テープ(ポリプロ:赤)、
リチウム電池:単4=27個、
単3=25個(予備含む)

アイスバイル、ピッケル、
登山靴、スパッツ、
ハーネス、
カラビナ(環付き含)X8、
ヌンチャクX2
笛、
ATCガイド、
ヘルメット、

【学術隊装備リスト】

《個人》

旅行用シャツ・ズボン・下着・Tシャツなど
日本円(20万円以上)・財布
パスポート・クレジットカード
ザック／サブザック
登山用シャツ・ズボン・下着
防寒具(フリースもしくは軽羽毛服)
カッパ上・下(ゴアテックス)
シュラフ・シュラフカバー・空気枕
ストック(2本)
トレッキングシューズ／登山靴・スパッツ
靴下(予備)
手袋(防寒／作業)
マット
水筒／テルモス
サングラス／メガネ・メガネ紐
帽子
ヘッドライト(単3型)(電池は隊で購入中)
整理袋(大小)
地図(10万中予定)・コンパス
ナイフ・笛
洗面用具一式・歯ブラシセット・爪切り
ハンカチ・バンダナ／スカーフ
ティッシュペーパー(旅行用ハンディタイプ)
計算機・筆記具・手帳・時計
個人食器セット(食器2・コップ・スプーン・箸)
折り畳み傘
軍手中・ライター中

《以下必要な方のみ》

カメラセット(フィルム・電池・メモリー)
文房具一式・フィールドノート
趣味本
辞書・中国語会話集
CD／MDウォークマン
双眼鏡
持病薬[各自で準備]
リップクリーム・日焼け止めクリーム
のど飴・サプリメント・大マスク
飲み物(スープ・味噌汁・お茶その他)
日本食(好みに応じて)
アルコール類

《共同》

3人用テント一式(モンベル)
2～3人用コッファーセット
ガスバーナ・コンロ台(ベニヤ板)
ガス X3個中
ポリ袋(ゴミ入れ等)中・布巾中
水入れ(折りたたみ式パック)
医薬品一式
修理キット(プライヤペンチ類)中
BC用テントシューズ／サンダル中
裁縫具キット
無線機 X2セット
短波ラジオ
スタッフパック
単3電池中X(学術:無線+ライト用)70個
カッタナイフ／はさみ中
アルコール類中(ビールx100 本)
(清酒は日本より持込み 7升)
ガムテープ
石けん、シャンプー、タオル=中
ロールペーパ、ウエットティッシュ

それぞれの霸王山

学術調査に参加して

那須 正義

私は、今回の登攀隊員・吉村氏と5年前、一寸した出会いで、中国地方の山々、利尻山、屋久島・宮之浦等、毎月一回程度同行し、山登りの面白さ、楽しさを教えてもらった。彼が1992年に南壁より初登頂を果たした、四姑娘山を見たいと思う気持ちが段々強くなってきた。

今年7月、ある旅行会社が募集している“チベット族の聖地、四姑娘山へ、ワーケーツングの旅”に妻と参加した。丁度雨期でエベレッジ、ブルボピー他、日本の山では想像が付かない程、沢山の花が咲いていたが、四姑娘山を見ることが出来ず、消化不良の気持ちで帰国した。

丁度、其の時、霸王山遠征隊 後方支援と学術調査に参加しないか、とお誘いを頂いた。

計画は以前から聞いていたので、体力的に不安はあったが二つ返事で参加した次第です。

9月22日、早朝より多くの支部会員のお見送りを受けて、広島空港～（上海経由）四川省・成都空港から（バス）1日半（15時間）かけて（小金経由）彭現村の村長の家（3210m）に着いた。

村長はお兄さんが、共産党書記で地元では名士の家柄だ。家は、白壁仕上げの二階建てで、他の家に見られない立派な仕上げだ。家の周囲は、畑が広がり、レタス（茎を料理してくれた）とエンドウ豆かゲリピーの類の豆が収穫を控えて植えられていた。収穫した食料を大切にするため、1階の中央の部屋は、収穫したばかりの豆が山と詰まれていた。2階中央の部屋は動物の肉を乾燥、保存に使うのか、乾いたヤクの足がブラ下っていた。来客が多いのか、部屋が6部屋あり各部屋共粗末なベッドが2つずつ、作り付けられていた。村長の妻の手造り料理を昼夜、朝ご馳走になった。夕食時は、近所の男性10人程が来て、飲食しながら話が弾み、聞き取り調査をしたが、村長の身内といえ、共産党書記が居る前でメモ取りながら質問するのには、言葉をばかかった。

9月25日には、テント、その他の荷物を馬8頭で2往復して運搬した。我々も9時出発し、BC予定地（3780m、

偶然にも富士山頂上と標高が同じ、北緯31度で九州鹿児島に相当する）に14時30分頃到着した。

26日10時半頃に別ルートから登頂ルートを調査にかけた登攀隊の3人が到着し合流した。

BCに隣接して住んでいる老夫婦（唐さん、黄さん）に随分お世話になり、聞き取り調査、道案内他、色々な調査に協力頂いた。夫婦は村長の妻の両親で、30年間当地で住んでいるとの事であった。電気も無く、電話、テレビ、新聞、から手紙も無く、世間の情報が一切伝わってこない不思議な世界を18日間体験した。
ヤップ地の朝は気温3～4度Cであるが、日中は20度C以上の日が殆どであった。樹林帯は標高4000m前後、草原は4300m位まであり、季節外れのたんぽぽも咲いていたり、ヤクの糞がこの付近まであった。

10月3日は登攀隊が登頂目指してACを出発した。後方支援に田中調査隊長とBCを8時に出発し、12時30分にAC（4754m）に到着した。その後、4時間ほど氷河及び其の周辺を調査した。夕食後、気温が下がってきたので、早めにシュラフにもぐり込んだ。周りが暗くなつた19時30分頃無線が入り、名越登攀隊長の元気な明るい、登頂成功の声が飛び込んできた。代わる代わる無線を交歓し、成功を称えあつた。山の崩落する音が一晩中続いていた。

4日の朝は-1度Cと、こちらに来て初めて体験する寒さだ。寒さと山の崩落で色々な事を想像しながら無線を待つた。10時頃、名越隊長より元気で下山中の無線がありホットした。しかし正午頃あと1時間で下山出来ると無線が入ったが、13時頃から今まで双眼鏡で見えていた人影も消え、話声も聞こえなくなった。13時20分ごろ帰還ルートの方で一段と大きな崩落の音がした。余計な想像を打ち消すのだが頭をよぎる。

14時35分ガレ場にカラフルな服装とヘルメット姿を見つけた時は、緊張と安堵で全身の力が抜けるようだった。

広島空港から用意していたに一駆けで乾杯したのでした。

自分にとつての霸王山

吉村千春

2000年の正月に長男と行ったキリマンジャロ登山以降、本格的な山登りから離れていた。仕事も多忙であったが、二人の大切な先輩を山で無くし、意気消沈していた。今般、支部10周年記念に名越さんから遠征の提案があり、「よし乗ってみよう」「名越さんや松島さんから遠征のノウハウを学ばせてもらおう」と意欲が湧いた。

自分がどこまで二人の先輩についていけるか?リードできるか?出来る限りの準備をしようと考えた。白内障の手術を受け、膝の治療を続ける中、毎日10キロの駆け足を行った。合同トレーニング以外は、少々頼りないが成長著しい小4の次男とゲレンデザイルを組んだ。

今回の遠征を新たな出発点として、横断山脈に軸足を置いた活動を地道にしてゆく覚悟です。最後に、支部の皆様に多大な応援していただき、本当に感謝に耐えません。

誠にありがとうございました。

収穫は勿論 初体験の初登頂ではあるが、獲得した宝は自分の力のなさの再認識であった。体力には自信があったが実際にはバテてしまい、走り込み不足、体力不足を痛感した。誰よりも入山日数は多い。しかし、いつもゆっくり歩くので心肺機能は高まっていたなかったのだ。忙しくても真面目で真剣なトレーニングをサボってはいけない。登ればしたが危ないビバークも経験した。準備段階で情報収集や下見をすべて他の二人に頼りきっていた。反省することや考えさせられる事の多い遠征であった。幸運にも恵まれた。支援していただいた多くの方々に感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとうございました。



アマノフーズの汁たちは旨い・軽いそして優れもの！

皆様に感謝！霸王山遠征

松島 宏

2005年のテンカンポチエ峰遠征は敗退に終わった。名越さんとの2年間に及ぶトレーニングは確実に自分の中の何かを変革してきた。リスクを背負って自力で目標に立ち向かうことの素晴らしさを実感した。再度挑戦を考えていたが、JAC隊での記念遠征が決まり、名越さんが偵察を実施し、勝算を考えたうえで中国四川省の霸王山と決めた。前回は余りに危険でリスクが大きいので、誰にも迷惑はかけられない。だから、プライベート隊とした。今回は組織の看板を背負い、多くの方からカンパを戴き、記念の遠征である。どうしても登りたかった。偵察した名越さんの話を聞けば、標高こそ低いがなかなかの強敵であることを予感した。先輩の山屋として最高に尊敬している名越さんとはまだ一緒に登りたいし、彼から学ぶ事は数限りなくある。二つ返事で参加を表明した。そしていつかは一緒にと思っていた吉村氏が参加表明し、三人のトレーニングが始まった。初めてザイルを組む人の実力は実際に一緒に登ってみないと分らない。大山の冬の壁で彼の実力を知る。私同様古いスタイルのクライマーであるが申し分のない実力であった。今回の



山のご飯はサタケに決まり！ごちそうさま～

霸王山まで

名越 實

中国の山に登りたくて情報を集めたり、あの辺に詳しい「横断山脈研究会」に入ったりして、資料を調べるうちに浮かび上がってきたのがこの山であった。今一番ホットなヒマラヤの東（南東チベット）地域に新鮮ないい山が多くあるのだが、僕の財力と時間でなんとかなりそうなのは四川省内くらいだった。しかしそこにはまだまだ新鮮なエリアと山があった。中でも四姑娘山域の西隣になる結斯溝流域を探索された高田良一さんの報告に“幻の高峰”（26km南の山頂よりの遠望）として「みな『マッタホルンみたいだ』と口々に言っていた。あるいは雪を被ったフィツツロイのようにも見えた。・・・今思うと、あのピークこそ、ピクトリア朝の女流探検家イザベラ・バード（明治期日本にも来て旅行記も出版している）が1896年に理県近くで見たという“マッターホルンの様な山”（ジャラ=山々の王）ではないだろうか」の記述があり強く印象に残った。

そんな中、兼森さんより「広島支部10周年事業でどこかに遠征を出さないか・・」との話しがあり、まんまとその甘言？に乗ることにした。

中村保さん（JAC会員）の報告などで他にも四川省には魅力的な山が多くあるようなので、偵察に行ってみることにする。費用を家計から出させるために山女の妻と結構山が好きな次男（中1）をそそのかして、06年夏「家族トレッキング」なるものをした。

康定～日隆の間にある山を2週間で見て回った。生憎（雨期で逆光の時間）霸王山の南西谷（喇嘛沟：ナマゴウ）からは一度に全容を見ることが出来なかつたが、ガスの合間に見え隠れする峨峨たる山容は僕の嗜好に合つており、外国人はおろか中国人も山や地域の調査に来た人はいない（前年、四姑娘山公園管理人で写真家の大川健三さんが、そして60年前日本の密偵？がBCになる冬牛棚子まで来ていたとのことだが）、との村長の言に地域探査の魅力を感じたのだった。僕個人の山登りなら、四姑娘山域にも嗜好に合う魅力的な岩山が沢山あるのだが、会（組織）としての遠征ということになれば、探検的要素もある霸王山エリアしかなかった。不遜にも？エリア丸ごとJAC広島支部で頂くことにした。

隊員募集にいち早く応募したのは、テンカンポチエ峰のパートナーである松島、それに横断山脈では四姑娘山南壁、ミニアコンカ、梅里雪山など多くの経験を持つ吉村の2人だった。アルパインスタイルを予定していたので登攀隊員はこれで十分だった。

難航したのは学術隊であったが、最終的に那須さんの参加を得て踏査班2名、BCでの調査班2名というどうにか隊としての体裁が出来たのは出発ひと月前のことであった。その他BC訪問隊や四姑娘山域トレッキング隊なども募集したがこちらは成立しなかった。

登攀隊は「岩稜または岩溝のアルパインスタイル」を想定していたので冬の大山や県内の人目につかない？岩場で夏でもアイゼンを着けピッケル、バイルを握ったスタイルでの合同トレーニングを繰り返した。今回はすべてをクライマーが背負って登攀するアルパインスタイルなので、必要最小限最軽量を隊員には求めた。各自ザック、シュラフ、靴、ライト・・・等を新調し、隊としてはJAC本部よりの助成金で最高の（値段だけが）アタックテントを購入し、捨て縄類はすべてケブラーに、ハーケンは軟鋼やカババーの替わりにカンプのチタン製品をネパールから？輸入した。食糧は全てお湯を掛けるだけで出来上がる（調理不要の）α米とフリーズドライにした。幸運なことにいずれも地元のサタケ（東広島）とアマノフーズ（福山）という最高の製品を製造している企業からの協賛支援を頂いた。資金面ではやはり会員諸氏からのカンパが絶大な支援となった。この場をお借りしてお礼申し上げる。

実際の遠征活動については、登攀のタクティクスにおける過度な譲歩？以外ほぼ満足している。たしかに世界遺産の四姑娘山域に比べればスケール的に劣るかもしれないが、我らが（四川旅遊公司の）通訳である鄭君が「名越さんいい所見つけましたねー」と感心し、四川省登山協会が僕の申請にヒントを得て、（中国国内の山は各省の登山協会に申請することになっている）5月以降矢継ぎ早に偵察隊を送り込んでいるところからも、広大な中国においても数少ない「新天地」であったことは間違いないと思う。その新天地において（現地で唐さんの協力を得てこそだが）ほぼくまなくパイオニアワークを実践出来、学術隊も大きな成果をあげ得たことは望外の幸せである。

【英文サマリー】

JAC Hiroshima China · Sichuan Bawangshan (5551m) first ascent.

(climbing leader Nagoshi Minoru)

(The outline and the characteristic of the purpose of mountain climbing, and an area.):

[The name of a party]

10th anniversary mountain climbing of JAC Hiroshima section foundation.

[The purpose of mountain climbing]

It aims at first gaining the summit of Bawangshan, and the academic investigation of a surrounding area.

Mountain area : China, Sichuan, Qionglai mountain system, the Xiaojin prefecture, Lianghexiang, Sanduandi area,Pangbachen

Mountain name, climbing route, climbing style :

Bawangshan (5551m),South rock ridge,Alpine style

Member : Nagoshi Minoru , Matsushima Hiroshi, Yoshimura Chiharu

Patrons of a mountaineering party : The Japanese Alpine Club Hiroshima section
(Overall leader: Sugimura Isao)

Mountain-climbing period: 2007/9/24---10/5

[The outline of an area]

The same Xiaojin within the prefecture is the uncivilizedness in which Bawangshan area is entire unlike the Siguniangshan area of world heritage.

Sightseeing in China or investigation of arts and sciences were not conducted at all not to mention the foreigner until I went into reconnaissance in this area in 2006.

If it goes west 4km from Xiaojin city, it will meet with the way of the direction of Bawangshan.

If the way is run north 25km, it will arrive at entrance of Bawangshan cluster of summits
(Lianghexiang, Sanduandi area).

If it goes a narrow country road to a northwest 6km from a bus stop, it will arrive at Village masters house of Pangba village.

From there, a load is carried on a horse.

If you walk along the driveway which is being used for shipment of lumber a long time ago for 40 to 50 years, and collapsed now 3km and a mountain path is gone up 1.5km northeast, it will arrive at the pasturing space of the cow set to BC (Dongniupingzi 3750m).

[The position and outline of Bawangshan]

102°41'E / 31°27'N

Bawangshan (it means king of mountains) has three remarkable ridge.

The Northeast ridge is long and continues to near the national road (G317) of 15km beyond.

The West ridge is connected with the next Shisunshan (5183m) in put up ridge, and a peak like a tower through Huangturongkou pass whose point of the is continues.

The South ridge is ridge which we reached this time, and the sharp peak called nine mountain ranges continues.

There is no peak which exceeds 5300m to every ridge.

Compared with them, Bawangshan is suitable for having extracted the group and just calling it "The king of mountains."

[Objective evaluation of climbing]

Since mountain climbing in an Alpine style was aimed at from the plan stage, a result can be said as a schedule.

Although it is low, since it is a steep mountain, the ability of a team and route selection determine success or failure.

Although it wavered in route choose variously, it became the South rock ridge route which was finally being planned at the beginning.

Although the steepest route was chosen, since it is the route adopted from the safe side, I think that it was good.

The vertical drop from AC (attack camp: 4700m) to a summit: 800m, 12 hours.

Climbing which attached the rope: The vertical drop of 300m, the degree of slant of 60-80 degrees, grade: American 5, 9

[Action record]

October 3. 7AM, AC start.

Under the west wall place was crossed, easy rock ditch between forward peak and Bawangshan is reached, being frightened of falling stone, and a saddle part is reached (10AM, 5100m).

The schedule which bivouacs in a saddle part is changed, all the loads are carried on the back as they are, and it traverses to the beginning of south rock ridge of a Iguana rock.(11AM, 5200m).

From there, a rope is attached and is climbing started.

The load of a tent or cooking utensils is put on the rock ledge of 3 pitch eye by the proposal of Y. The head person stuck only the climbing tool, has worn rubber sole shoes, and since the rock is in turn, he reaches comfortably.

It takes the place in five pitch each one.

We war reached ridge's head of 10 pitch climb with a 60m rope.

From there, the degree of slant falls and the snow cap of the summit is followed (18:10).

Mix climbing is arrived at a summit on two pitches and about 100m of snowy slopes.

It is 19:30 that three persons gathered.

Since Bawangshan has been the target of faith in this area, the head of a statue of the Goddess of Bodhisattva cannot be soiled.

The place of 5m of summit this side is made a summit.

Go down start is carried out at 20:00, and it gets down to the head of South rock ridge (5500m). It becomes a bivouac of securing, wearing, accepting and wearing freely the place which sits on each of three persons (21:00).

A cold wind continuing blowing and becoming cold to 8 or less minus toward morning the night, (although it was a night warm till the previous day.)

The rocks whole surface truth coating was carried out with white frost.

October 4.

The day which continued trembling with cold break, and it is 40km that direction.

The silhouette of Siguniangshan mountains floating on the sea of clouds of dawn color was brilliant.

Descent is begun for 6:40.

Rocks are in difficulties by sliding because of frost.

Depository articles are collected on the way, water is boiled, a meal is taken, and it has a nap.

In rappel 7 pitch, it arrives at the saddle part of a Iguana rock.

Furthermore, it gets down from rock ditch by rappel and crime down, and comes back to AC safely (14:50).

October 5.

Shisungshan (5183m) which stands in a row west of Bawangshan is attacked by four persons.

(Tanaka Katsuhiko, Nasu Masayoshi, Matsushima Hiroshi, and Nagoshi Minoru.)

A rope is not used.

13:00, first ascent of the summit.

14:00, the go down start.

All loads are carried on the back as they are, and it goes down to BC at 15:00.



左・霸王山、右・石筍山の北面（黄土栄口より）

あとがき

偵察から2年、やっと「支部創立10周年記念霸王山遠征」は終わった。しかし霸王山山域の研究・開発は途についたばかりである。“世界遺産”四姑娘山域の北部、すなわち小金県から理県にかけては地理学的に忘れ去られたエリアと言えるが、一歩踏み込めばパイオニアスピリットを思う存分満足させてくれるもの豊富に内蔵した土地である。それは人文であり、山地であり、風景である。けっして観光地では得られないものを惜しげもなく提供してくれる。観光地においてフィールドは不特定多数、万人のためにあるが、パイオニアワークにおいてフィールドは我らの為だけにある。これこそがその地に先駆けてコミットした者にのみもたらせられる僥倖だと思う。

JACにお世話になる機縁となった三国友好チョモランマ遠征より今年で20年。さあ次が待っている。

100人余の会員・支援者の方々と6人の仲間に満腔の感謝を捧げる。（名越）

(社) 日本山岳会・広島支部創立十周年記念登山隊
発行日：2008年（平成20年）3月
発行人：杉村 功
編集人：名越 實